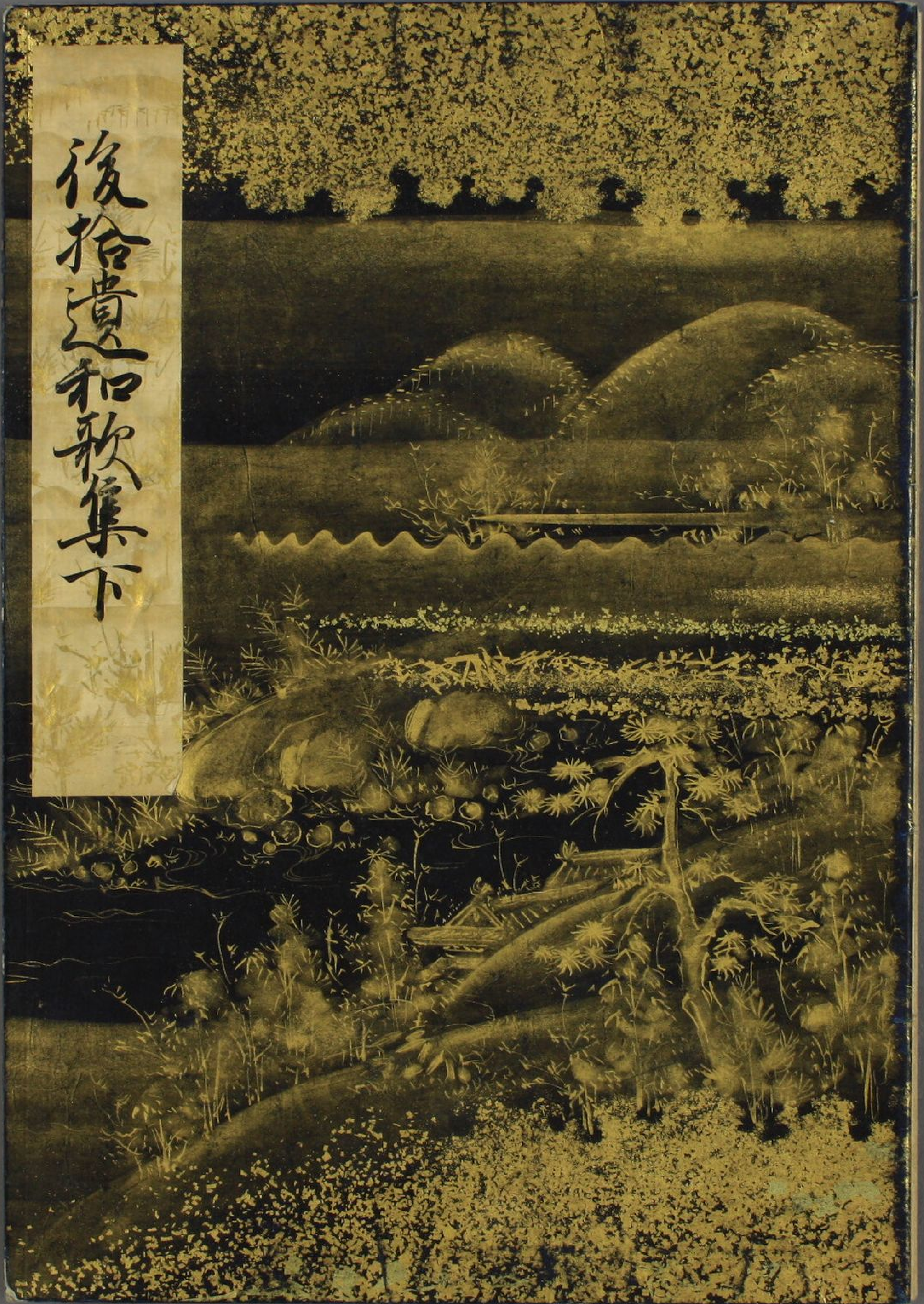
後拾遺和歌集下



後拾遺和歌抄巻第十一

恋一

春宮と申ける時内侍のかみのもとにはし
めてつかはしける

後朱雀院御製

ほのかにもしらせてしかな春霞かすみのうちにおもふこゝろを

はしめたる人のもとへつかはしける

叡覚法師

木葉ちる山下水の埋もて流れもやらぬ物をこそ思へ

題不知

馬内侍

いかなれはしらぬにおふるうきぬなは苦しや心人しれすのみ

女をうらみてめのとのもとにつかはしけ
る

源頼光朝臣

かくなんとあまのいさり火ほのめかせ磯への波のをりもよからは
えへし

源敦家朝臣母

おさふる波打出ぬへくそつゝましさえひかるへき汀なれは

さ弐式人云中納言惟仲にをくれ
て侍けるおりくいりきれためと
まうりよめる

ちしめある女につかはしける

平経章朝臣

寂しさに冬野にありてそらむし落葉のめさるやとふなを

大江嘉言

思ひつゝやまぶむよりはふるさとにしばし人はまたへぬ

たゝこのたゝめて人のりさ人ゆかりけり

けりかりけりて

和泉式部

おほめくな誰ともなくてよひゝに夢にみえきん我そ其人

女にはしめて遣はしける　藤原実方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草さしも志らしなもゆる思ひを

またしめれこひとよめる

實源法師

おほかたの人にも世はいふを猶君とこそ身と知るそなき

月あかゝりけるに秋なるめしけるよ

そらへて限つかしきる

源則成

年をへて長月の秋の月かけの里のこのころをそゝ

心けさらんまつらしきる

藤原長能

汲て知人もなからん宿の山の木の下かけは葉かくれつゝ

そうかうしたる女のもとにれとくをおりひ
けておもひなる女みにやりける
よみ人しらす
小舟にをきかへりつゝよる人せよ池の汀の玉を拾ふ
題不知　藤原通頼
独してなかむる宿のつまにおふる忍ふとたにも知せてしかな
道命法師
さひしまりにいひ出る程は数まさぬ身をしる人にしらせまほしかな
八月許に女のもとにまかりてつかはし
てけるよしけり

祭主輔親
篠の葉の思ひをおくれそきふかに出る秋としらなん
題しらす　藤原兼房朝臣
いまはゝ海をしらぬ恋しきわかれをはこそなくして
女をひろくく絹きるにおさけなくして
いりにきれたつとめて清かりける
源兼澄
まれりとも袖ふり遠くありし雲きさ月にふむ橘とも云
五節よいてゝいひけくるひなとしことり
けるとうるふつかりける

中納言定成

雲の上にはかりさしける日影にもさやかに星のかけはなし
あしめてあのりにこを立日つゝりしきる

藤原能通朝臣

年経つゝ山下水の落つれは春風よりもとけなん

題不知　　能因法師

わかともに人の心を思ひてやけさ立春の風はよそへく
みつのえすまのかりしとせはおもけま
ましよかな

祭主輔親

こしまのあしのねにかくれの浦なれやかくふかきみをたつみぬ
返事せぬ女のもとへいのひとこさてなむ
つかはしける

道命法師

若はるゝ我身のさしはかるてもしほのふりさはそらなれ
返事せぬ人に山寺よりつかはし
うしきを
さひしさの山に入にしかはもみなかみのいつれさまより
女のいふかしかれとにまゐりて七月七日
りつかはしける

前大納言公任

雲ゐにて契りし中は七夕をうらやむはかりなりにけるかな

七夕後朝に女のもとにつかはしける

藤原隆資

逢ことはいつとなけれと七夕のわかるゝはをそうらやまれける

人のこゝろをはかりかねてみて月の夜に見えて

なといひて待けるに

馬内侍

逢ことのとこなつかしきはいかゝりし月にはなしとて歌よませ

題不知

藤原顕季朝臣

鴫の羽刈田にあまた稲くされは家にとは人のはかる

うへの折のことも雨のなをさくりてかなてまつりけるにあふさかの関れ恋を

よませたまひける

御製

秋夜のなかきをたのましは恋しきは寒衣清衣に袖をぬらしつゝ

あひしらす

道命法師

逢ことはたえてそ人めかしこしめ心かりかねてみえ

よみ人しらす

忘しかし我になかさて下紐にむかりれ我にかとや寄

和泉式部

下消る雪まの草のめつらしく我おもふ人にあひ見てしかな

入道一品宮に侍けるみちのくにへまかりとて

小侍従かもとし侍る

源頼綱朝臣

奥山の松葉しのさ降雪の消えもとみぬ哉

うれしきといふわかれありふとら

よろし侍けるに人よりのいて

まくれともなくてますまにかれけ

こそて侍るそしける

源政成朝臣

恋しさを忘るゝ人をあはれとてつらきと思ふ我や侍る

身いしらす

平兼盛

忘そめし心のほかに恨つゝ人のつらさを我になして

文かよはす女のもとへくまかりけるか

つれなくなりて

藤原為時

いそせんぞきてもいそくたのまぬと思ふにいとゝめつゝ彼と

云資へにあひて侍けるに中納言

定頼卿のひくなそとつましきるとひま

なきはまさとやいきんそえんゆかり
かたらひ侍けるにつかはしける

相模

逢ことのなきよりかねてつらけれはさてあらましにぬるゝ袖か
年よりかたらひ侍ける女の秋なりなり
て露まかりてかたらひえんといひて侍け
まて八月許につかはしける

大中臣能宣朝臣

ゆくとしの秋をまつにそたのめしの逢露ハに
宇治前太政大臣家三十講後乃歌合に

堀河右大臣

逢まてとせめて命のをしけれは恋こそ人のいのりなりけれ
頼むことなき人とたのみいやまさる
おとこにかれりて

相模

つきもせぬ恋に涙をわかすかなこやなゝくりの出湯なるらん
女のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

あふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくまえの沼
題不知

永源法師

恋しといふとも忍てやみなまし難面人のなき世なりせは

赤染衛門

住わたりける人を家といひてまて恋すなる頼もしけなき女のふちに身をなけけるをきゝて待

つまけもてしよめる

源道済

身を捨て深き淵にも入ぬへし底の心のしらまほしさに

題しらす　大中臣能宣朝臣

恋しくて逢とも夢にみる夜はいとゝ寝覚そ侘しかりける

賀茂臨時祭舞人にてあひたりけるに祭

かつひとりをかしこまりてあそひ侍りける女

房の桟敷見車よりかうきぬのあをき

とりをひて侍りけるをとつきれし祭

ようむかちのくむすひしもとを

いひけるをてよめる

実方朝臣

いく夜経ひともいはしかたく袖いかてかく揚をと

返し　よみ人不知

揚よそ袖のしたいと緑とゝめよなかくしせさりつゝん

題しらす　能因法師

錦木はたてなからこそ朽にけれけふの細布むねあはしとや

西宮前左大臣

須磨乃浦に漕舟のゆりかへ見ん人ふつや
女のもとにていひつかはしける

ほどとりもふかきよ恋されて今迄よにふるも我身かな
久し　　小野宮太政大臣女

あまたにも命のみこそ惜けれはいはてや年をへて何のしるしを
題しらす　　小弁

思知人もありけるよをあはれさへ雖面恋よ身をやかへてん

平兼盛

人しれすあふを待まに恋しなは何にかへつる命とかいはん

長久二年弘徽殿女御歌合し侍りけるに
よめる　　永成法師

恋しなん命はことの数ならてつれなき人のはてそゆかしき

俊綱朝臣の家に歌合しけるに題をさ
ぐりて斉よみ侍るに恋をよめる　　中原政義

難面てやみぬる人によしなく恋しぬとしてしるに
文よかよむにより侍ぬへき斉とて俊綱
たゝへとまよ侍を侍けるに

良暹法師

あさちふの乱て忘そまさるよはしものかれはてゆかん

藤原国房

唐衣袖に涙のつゆを見むるしき忘よみのへぬらん

関白前太政大臣家にて人々おもふ忘と

いふことをよみ侍けるに

左大臣

秋の月はところを驚とぬにけりふかき忘ハ忘れそと

右大臣

年をへてたえぬ山の椎柴やつまきこる人のしるらん

日ころも日ことにたのめさる人の侍をつく

まうこされ見えけれハよみ侍ける

道命法師

うきてしもなしと思へりしものそいと

なけきそふらす

後拾遺和歌抄巻第十二

恋二

女にはしめて文つかはしける　祭主輔親

礒なくらふる心は何事もや知ていふらんはふら

実範朝臣のむすめのもとにかよひそめて

てあしたにつかはしける

源頼綱朝臣

いまはこの人にはけさはつてこそ明るよりとて心なかりけん

惟任朝臣にかはりてよみ侍ける

永源法師

よそにのみありそをたのまで滝山さこそはあやしき月

平致親朝臣のむすめにまかりそめて

初てまかれあしたにつかはしける

藤原隆方朝臣

くるゝ間の千とせをすくす心ちしてまつは誠にひさしかりけり

題不知　源定季

恋ふよりはいとゝ実行のふしとにはよるれとも忘るゝかな

女のもとよりかへりてつかはしける

少将藤原義孝

定めなくふりける命さへあらんとおもひけるかな
人のもとにいひける人まかりてよめる
伊勢大輔
ふるさとの猶まつふることをしらぬそてをとけて見え
せれりとより雪のふりける日なりけり
けふしもまた
藤原道信朝臣
かへるさの道やはかはるかはらねどとくるにまどふけさのあは雪
明ぬれはくるゝものとはしりながら猶うらめしき朝ぼらけかな
おなし人のもとにとまりて侍けるにまかりて
けふ見んと契りしとてつかはさりけれは
よめる
ちれは滝よ波よせくるらんちらしてもあらまほしてもいとゞ[illegible]
題しらず　永源法師
逢ことのはかなき恋にまさりけれ難波人とてかは[illegible]
女のもとにつかはしける
西宮左大臣
うちはへ苦しきものを逢ことのとこいりれ暮にあるさや
題しらず　藤原道信朝臣
あまの川ふりし波の雲間よりとをくさえて侍りし

清原元輔

知人もなくてやみぬる事をとといそ波の袖にかかるらん
おもひきやまてといひしことせく給けり
みるめもよしかん給ける

相摸

たのむるに影へささまはかかる人待に心をこめてまくらに女房
とられくはいふたとへく事ゆくしたり
なとひとく給けるはよめる
謙めつくしありし源に舊りてともゝしは筆にみえんをおそれ
中関白おほき給まつりかたちかうなる人

にはいひそめり給そりしものめてゆるしてこ
ころまけつてとめて女よろこりくよめる

赤染衛門

やすらひて祇なましもの夜よふかくまて月をみしは
人のさそめてこそす給それは流とめてつれ
しけれ

和泉式部

なさけある御ことつかひをもねむ女のもとに親の毛なかに
越前なる京理ゆふさりふに人とひとくを
とせさりけるはよめる

大輔命婦

夕露をはらはゝ上とみせもせて袖よかさねてとゆかしかな

女のもとにつかはしける

藤原滋方朝臣

いかにせんおほかたやみに春の日やよそのまつさへかくらしまよはん

返し

童木

むかし我か身のきしさはしもはなれ人の心みちらまもさりしらず

源重之

よそへとみますをま草刈に行人も蓋にはさらにこゝろ持には

女のもとにまうでたりけるかくれておと

なかりけれはかへりてつかはしける

源師賢朝臣

待し夜は我身ひとつとおもひしに浪のへさこそ見ゆるなれ

ただ大将朝光女のもとにまかりけるに

あやまりてえりねとひ給へれはかへり

てよみて女のもとへよりつかはしける

よみ人不知

あま雲のなかりの村雨まつにも袖ぬれぬ

りのひとりけれはとこそみえこと

しかよりと知りつゝしはつとき

まはよ哉

一宮紀伊

我恋ハあまのはらなる月なれやくるれハ出る影をのミみる

大貳高遠物いひ侍ける女の家にまかりて
らふ中まかてしのひてまいりけれハ女の母忌侍
りけるをまかりてしのひてまいりけるを
いつくにてきゝ女乃母のいたくつゝみけるに

よミ人不知

さて我月かけも何か恨へき秋ハ我そへありけれ

かへし

大貳高遠

秋よそとかたにまかせハとひてまし人の待いつ知へき

題不知　　和泉式部

待の世にいやしも人といふことに隙もなきに若の筆き
兼仲朝臣もの言ひ侍けると聞て思ひわひ侍
人に報にもおもふとていひ侍けれハよめる

高階章行朝臣女

人めのミしけき深山のあをつゝら苦しき世をもおもひ絶める

題しらす　　読人不知

よしさらハ来て恋しき人のもとへかたにとひ絶え
人のむすめにおやのしらせて
ものいふ人の侍けるをおやきゝて

つきそひ給へれしわらはこゝろう
てさふらひけるとよみてありけ
るときゝてなんなかなかりける
侍りけり

読人しらず

しらめやも人めをつゝみ世をは渡さは
そのひてりのたりひ給けるこゝろは
ゝかやきみさりきんちとゝ人に
とりわれむつゝけみなかきそひ給き
まいらめらにくゝなんとひけり

けりかん

銭にかへてあすかゝはとおもひなるよしを
読はへりけるとかへしの東ちて瀬よ
なりかはとなつうくりとに

赤染衛門

渕やさは世にはなけゝりあすか川あさきをふかくなす世なりせは

道済か中へまかりてありける
女のもとよりつかはしける

よみ人しらず

逢ことはまたよもやとんかんの瀬は道さ指まて有思ふ

こゝろかゝぬとやゆかりきんうくさらひ
けりつ女のりよにまゐりてはべりつふ
うきつきく侍けり

右大臣

我こゝろふをはらひてはゝかよふまでむとおもふ
れとこれこむとのひけりつとはちよつひ
てゆふけとしなせきるによふらし
つきけるれたゝかそくて読侍けり

よき人しらす

こゝまでとはるほど遠く雲ゐにむつむかふ

入道摂政九月ばかりにまかりてよみまかりし
て待けるにあけて過しにせて侍り
きるをとしつかはしけり

大納言道綱母

えらり霧をまくらにひぬ袖の上にきさいはおもひしかり

中関白女のもとよりおくりてさふらへり
てらふをいそきにかゝるらん
侍りけるはよめる

馬内侍

暁の露は枕におきけるを草葉の上に何とおきけん

あきれけるにまてこむといひしをたのみけるたと
こゝに
相摸
はかなき歌くさりのうち世はかなきに我身やあはれよそん
はかなれいとしうめひなしこの名こそ
てふなといひあかへり
和泉式部
見し人にわすられてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまね
輔親のいひ侍ける女のもとに人を
あめふりしかはかさかりてなといへり
けるくりともにとてやさしかりしのをとて
女のかへしけり
よみ人しらす
忘らるゝ身をしる雨はふらねとも袖はかりこそかわかさりけれ
思ひかけける女のまこと人よりの
いふときゝてつかはしける
藤原能通朝臣
越えにける波をはしらて末の松ちよまてとのみたのみけるかな
かたらひ侍ける女の人よりものいふと
きゝてつかはしける
藤原実方朝臣

浦風になひきにけりな里のあまのたくもの煙心よはさは

清少納言人にハしらせてたえぬなかにて
て侍けるにひさしうおとつれ侍らさり
けれハよそ〳〵にてものなといひ侍
けり女さしよりて忘すれにけりな
といひ侍けれハよめる

忘れしよ又忘すれなよかハらやの下焼煙下むせひつゝ

をとこのかれ〳〵になり侍ける比よめる

読人不知

風の音の身にしむはかりきこゆるハ我身に秋やちかくなるらん

かれ〳〵なるをとこのおほつかなくなと
いひたるによみ侍ける

大貳三位

有間山ゐなの篠原風吹はいてそよ（そよそのり）人を忘れやハする

右大将道綱ひさしうおとせてなとかうら
みぬそといひ侍けるにむすめに
かはりてよみ侍ける

赤染衛門

うらむとも今ハみえしとおもふこそせめてつらさの餘なれ

よしとにこむといひくようれし侍ける

をとこのもとにつかはしける

和泉式部

と秋はへかくこそおもひめきふ萬なまし命とゝか
おとこらしむかしやおもきんなふをとき
つまふく又いかをとせしといひくそ待
まけましといくとひまんちつくこなと
つれて待まつふよめ

蒲深来つ

ゆかしさは忘つゝ月九如も今日とゝまらぬ命なから

題不知

藤原長能

いとふとも忘ぬはかなき知かへしふとあらぬ心なきり

七月七日二条院のおかむらさふらひて
まいらせ給ける

後冷泉院御製

逢ことは七夕つめにまとはれて海わたりさ
ゝはきさ乃橋

後拾遺和歌抄巻第十三

戀三

陽明門院皇后宮と申ける時ひさしく
うちにまゐらせ給はざりければ五月
五日内よりたてまつらせ給ける

後朱雀院御製

あやめ草かけし袂のねを絶てさらに恋路にまよふ比哉

服に侍りけるころ思ひかけたる人につかはし
ける

清原元輔

藤衣はつるゝ袖のいとよはみ絶てあひみぬ程ぞ侘しき

高階成順石山にこもりてひさしく
をとし侍らざりければよめる

伊勢大輔

みるめこそあふみの海にかたからめふきだにかよへ志賀の浦風

あひそめてみえ侍らざりける女
につかはしける

叡覚法師

秋風にあひきなりしを葛の葉のうらめしくのみなりまさる哉

侍りけるにあかしにまかりて京なる
女につかはしける

大江匡衡朝臣

ゐなかに難波のことをなりけるに遣唐経信松といひける
源遠古らむすめに物いひわたり侍りける
ふかりかはらけとりしにおまへにありける女を又
こ人おひたゝみ侍りけり伊勢の国よ
くたりてこやこといひしうといひ侍けれ
まつ人へんとおもへしころまやれかね
らんとおもひつりてなあ

祭主輔親

我おもふ都のはなれとふるさとへ君をしもえこそ

橘則光朝臣みちのくにへまかりて侍り
けるにいのこおりいひてまかりなん
とするを女とひ侍けまかりなん

光朝法師母

こ家乃衣袖はこおりついてよそに侍むとも
とおれとくろなる女につかふけつ

藤原国房

為さいのみやに侍ける女のまさむに心はよそに
人のくにゝ女まさのひてりのいひ侍ける
ありけれにまかりてくりけりみちに

此女をおとこの中へかくしてなむ給へり
あふみのせきにゆきあひてせんかく
なくなりぬるを人とゝへし事
といひつかはしける

大中臣能宣朝臣

何方とわきて詠め玉ほこのみちの空なかりせは

よみ人しらす

別ゆく道は雲井となりぬともさはりこゆかけ思ひをこせよ

あつまにまかりける人につかはしける

民部卿経信

東路の旅の空をそ思ひやるそなたに出る月をなかめて

返し

康資王母

思ひやれしらぬ雲路に入ぬる乃月より外になかめやはする

同人につかはしける

左近中将隆綱

ゆくへき旅とそへて待人は月日そ嬉しかりける

返し

康資王母

東屋の庵の下に過しつるしられいはや月日のゆくもしらし

題不知

藤原惟規

都まのかけやの下にくれたるに思ひ乱てまくらにそ咲

りのへまかりけるになかみちにてとふ
ところふく人と思ひてよみける

増基法師

ひなれはあやとへ釼のえたのとかれ遠あつまの仮寝なり
とくとき所よ待ける女はつかしけり

左大弁通俊

さひやかなの室にゆきありおほしれとてはまいるに
清家ちかれよりにあはのくにゝくたり侍
けるに其の国の女に語らひまうけ侍り
まかりて後のくにゝなりかへりて後ま

のありけるもしは女乃母よりにつかはしける
りしきる

読人しらす

ふるさとハ生田乃杜よ波乃ん恋しきにこそ志あへりきれ
身のめけるわしハれひ行しうみえ侍し
さりけれはよみ侍ける

律師慶意

粉めしと給ふにひころはこれわもしハ玉のとよみたまぬ
源粉總郷たちのりとれにみちれにゝ侍り
けるに身のくに乃女よりおひく又なと
し侍りけるをとられハ女のよめる

よみ人しらず

浅ましやみしは夢かととふ程におとろかすにも成ぬへきかな

中納言定頼かりにいひつかはしける

大和宣旨

逢ことは夢中にもうれしかりたえまくらこそしられ

題不知

大納言忠家

いつはりを嬉しかりしは面影にうつりつれ逢よありせハ

たとこおもひける女と志のひよ抽いて給ひ

きりひまなきころをとこてかまくらよ

なり給ひれい女のいひつかはしける

よみ人しらず

我宿の菊乃志のふかとよせてやらてと萩う三菊

成資朝臣やまとのかみにて侍りけると

きりのいひをこせり侍りあえてとて

つふけるのちゝやよまかりて侍りけ

くる西よいま隠てそ侍る

皇太后宮陸奥

逢ことを今は限と三輪の山杉の過にしかたそ恋しき

五節よいそて侍ける人をとらへかすゑ

称んとやふたとこ侍られとやとせさり

けさハ女まうかりて侍りけるに

よみ人しらず

枕むすとにひくたびもおほかり人をみぬ身の心
しらず　侍らん

修行者の房にまかれる人なくなりにけるのちにまうできて
れりひけるわたりの三井寺にあ
かりてひはしらせとし侍りけるさま
けさハよみ侍りける

僧都遍救

逢坂の関の清水やにごるらん入りにし人の影のみえぬハ

きらひ侍りけるわたりのこと人入れ
りひつきふくれハ[illegible]をとこ
せく侍るにさすがにおぼえけれハ
よみてつかはしける

前律師慶暹

まこと人はぬそねよやとてなんふかくにさまやかす
すれしとちさりける女のひはしら
あひ侍りてほどまれハよめる

大中臣輔弘

侍りしとも思ひたちてやみにしは我もそなれぬ

ひさしうとはぬ人のもとへつかはし侍ける
又をとこもすみかれ侍りにけれはよめる

和泉式部

中〱にうらみしまてにやみにせはいはて猶よかと思
ひしらす

浮世とも又誰になくさめむ思ひしらすもとゝゐぬ恋
りのいひわたり侍ける女おやなとしりて
むことありてとゝめられけれはさり
けましかはとよめる

源政成

年まてや恨みんと思ひしを思ふはつきせぬ物にそ有ける

伊勢の斎宮わたりよりのほりて侍ける
人にしのひてかよひけることをおほや
けもきこしめしてまもりめなとそ
つけられけれは忍ひにもかよはすな
りにけれはよみ侍ける

右京大夫道雅

逢坂は東路とこそ聞しかと心つくしの関にそ有ける
榊葉のゆふしてかけしその神にをしかへしても似たる頃かな
今はたゝ思ひ絶なんとはかりを人伝ならていふよしもかな

又おなし所にむすひつけさせ給ける

みちのくのをたえの橋やこれならんふみみふますみまとはす

と

こと語らひ給ける女のことにはまふなり

てのちいしやまにこもりてあひく給け

ましくよみ給ける

前大納言経輔

忘しさと忘れやはする中々にいさゝはすさのみ渚

中納言定頼いまはゆふこしなと

いひくりてなとりしきてつかはさり

けるをしつかはし侍る

ゆかん

こしかたにいまそ絶なかりける人のまことといひて侍

まし

返しらず

和泉式部

黒髪の乱れもしらすうちふせはまつかきやりし人そ恋しき

清原元輔

ある女に

梅かえの露のしつくのなかにひに消ぬへきを

たとこ小ゝしけくゆうしそくなとけく

めてなをくゝ給りけるにかてしれおもひに

むすひつけ侍ける

和泉式部

なれなれすは涙よ浅てたえぬ道はまかせて常のふみそそれ
見しらす　侍るる

中絶の葛城山の岩橋はふみみることもかたくそありける

二条院よ侍ける人のもとにつかはしける　大弐良基

三重なれといふはへそそふとなるなかすまされは猶それ

題不知　高階良成

忘れなむとそふよおもて袂ふく(?)なるなきは涙なりけり

大納言忠家母

いつはりおもふなるさへ歎かれはまたはしよのつてとおもひなるらむ

権僧正静円

逢とのみ見えてふる夜の夢ならは枕よ身をもねなましものを

ここちれいならす侍けるころ人のもとにつかはしける

和泉式部

あらさらん世の外の思出に今一たひのあふこともかな

ちかくとりふこゝのくふ侍りけるころたりくまてひとく京に侍る敦儀の中将のもとにつかはしける

藤原惟規

都に(も)は恋しき人のおほかれは猶此度はいかて(む)とそ思ふ

心かはりし侍ける人のもとにつかはしける

周防内侍

契りしにあらぬつらさも逢ことのなきにはえこそ恨さりけれ

題しらす

左京大夫道雅

涙やは又もあふへき妻ならんなくよりほかのなくさめそなき

西宮前左大臣

忘れなんそれも恨さと思ふらんこふらんとたに思ひおこせで

七月七日女のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

年のうちにあふ夜あまたにあらねとも七夕にかす今

増基法師

七夕をかりしとみれは我身さへ袖は涙にぬれまさりける

題不知

馬内侍

くもてにかへき絶まけつらはかなのいのちをさへはなかゝりける

後拾遺和歌抄巻第十四

恋四

心かはりて侍ける女に人にかはりて
よみ侍りける

清原元輔

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさしとは

中納言定頼かれかれになりにけれ

公円法師母

芦のねの浮身のほとゝ知ぬれは恨ぬ袖も波はたちけり

としころあひ見ぬ人に忘られて侍りける

道命法師

逢みしを嬉しきことゝ思ひしはかへりて後の歎き成けり

題不知

藤原元真

深山木のこりやしぬらんと思ふまにいとゝ思ひのもえまさるかな

恵慶法師

岩代のもりのいはしと思へとも雫にぬるゝ身をいかにせん

曽祢好忠

あちきなく我身にまさる物やあると恋せし人をもときしものを

和泉式部

我といかて難面て心みんつらき人こそ忘れかたけれ

しのひて物いひ侍けるころよそに侍りて

読人不知

あやしくもわかみやまきの袂かは思ひは秋よのことゝおもふに

西宮前大臣

打思ひなくさせけむ君ゆゑに涙は衣に出にけるかな

長暦二年四月廿八日内裏歌合に読る

弁乳母

恋しとも涙のなかれなかりせはさしもは人にしられましやは

読人しらす

源道済

人しれす恋しなはたれゆゑと世のはかなさを人やしのはん

思ひかねける女のもとへ

堀河右大臣

人しれすとかくは袖を思ひつるなみたそ恨なりける

冬の夜の恋をよめる

藤原国房

とひ絶て寝る夜の袂よりちゝや涙のこほりなるらん

読人しらす

清原元輔

恨むらんならて秋の身すらかへる夜は風にそもえあかつき

よみ人しらす

世中にはかなきそ人のつらきむとおもふかりそ物はおもひき

道命法師

よるへいせのこゝろあつておもひやらんやわれておとろかすらん

平兼盛

こぬてふといひそともおもひつゝきをもとしはしはしとおもに

われとこのおもえてまつりきゝみかゝへくに

ありけり

中原頼成妻

おもひやるかたなきまゝにふるさとの人のこゝろそうらやまれける

題不知

能因法師

園をえ梅の匂ひよ鈴かくあやしく恋のまたのちるか

ゆかりん

あやしとみかとてえ風まちの橋の浦なかとりの御樋をそわかん

和泉式部

世中に恋てふ色はなけれともふかく身にしむ物にそありけ

るかたしらぬ女なり

清原元輔

ゆくふめいてふへを首としんかそくをもとしてふるか

堀河右大臣のもとにつかはしける

大弐三位

恋しさのうきにまきるゝ物ならはまたふたゝひと君をみましや

露なとさかりの萩にゆりて世のりとれつ

よみける

源道済

庭の面は蘿のしたそしるあん物とふ人のよにもなかりせは

思ふ知

藤原有親

あはれとも人をつらきはなけれはや命をもかくたのむなりけり

けうかん

我袖と秋の草葉はくらへみや何れまさると露のぬれはと

かりそ淋の濱の真砂をかそへても独ねの数はしらるへく

藤原長能

かそへては空なる星もしる物を何つゝさし数はしらまし

二月はかり人のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

つれ〳〵と思へはなかき菖蒲の日小影むとくは詠をそする

五月五日人のもとにつかはしける

和泉式部

見さゝに我乃あやめの浮く〳〵と思へはねのみそ流れける

題不知

多くひとつ深月夜思ふ人にかゝることゝひとつには

忘らるゝはちゝに砕くまてもひとつにしらせぬ物にそありける

渡川おなし瀬よりはなかるれと思ひはきえぬ物にそありける

小弁

我恋ハ増田の池のうきぬなハくるしくてのミ年をふるかな
源道済
大かたにふるとそ見し五月雨ハ物思ふ袖のなにこそ有けれ
西宮前太政大臣
よそに人ハ雨とや見らん我めにちかれ袖乃露を
日にそへてつらさのこともまさりなん葉てはやそぬるともわする
天徳四年内裏歌合によめる
藤原元真
君こふとかつハ消つゝ経るほとをかくてもいける身とや覧
題しらす
恋しされ忘ても有ぬへき物ならハ何かハうきみをもうらみん
中納言定頼かもとにつかはしける
大和宣旨
恋しさを忍ひもあへぬ何せむに人やしらんとおもふ物かは
小弁かもとにつかはしける
民部卿経信
君かためおつる涙の玉ならハつらぬきかけてみせまし物を
題しらす
西宮前太政大臣
契しハ忘るゝとこそ思ほえめやゝ何乃ハむすひかなん
昔ふることハおもひ出てそ物ハ悲しと思ふまたかもとなるをうさ

女にかはりてよみ侍りける

入道摂政

こひしさに露の命そ消ぬへき忘れにしよりこゝろよはさに

題不知　　よみ人

風ふけは枕のうへよ乱れて恋あえせぬことはり

永承六年内裏歌合に

恨侘ほさぬ袖たにある物を恋にくちなん名こそをしけれ

題しらす

神な月ねさめは時雨にことよせてかたしく袖をほしそわつらふ

和泉式部

はまへにおもふこゝろの袖と見て恋しさよりにぬれて袖

在原業能

我心かくれのかゝるや山下樋のまくらにしらせ
かよへ小なり待きのれとこにまゐ

藤原範永朝臣女

打とけてゆるともなくて恋しさにあふ夜の恨えなん

題不知　　和泉式部

人の身は忘れし人のかひもなく恋にけりとみえぬなりけり
ゆるされぬ恋のとことはにたのむ人をまつよりもねさめかなしき　良

女のもとにつかはしける

入道摂政

我宿は春乃山へにつまこめてとりえ出して見つめにとみてなん

返し　大納言道綱母

春の野につまこもひたのかくれなはきゝなを見つゝ見えこそはらん

たなし二月なり

入道摂政

春乃日はみるめもあまり我身こそしらぬひなかねとりえゆかん

永承四年内裏歌合によめる

相模

あやなくも心をなつ我宿や柳乃あをき糸にかゝる雲

堀河右大臣

うとてもねゝにおもひそめぬる恋なれは心ありかね捨まそは

ゆくかりけり女なり

平兼盛

難波かた汀の芦のおいのよにうらみてそふる人の心を

思ふ知

源重之

松嶋やをしまの磯にあさりせし海士の袖こそかくはぬれしか

盛少将

限そとおもふにつきぬ涙かなおさふる袖もくちぬはかりに

菊乃ふり行けつ秋女なり

くもりして雲まもみえぬ五月雨に絶えずも物思ふ寝覚なりけり

藤原長能

題しらず　　相模

涙こそ河となりぬれ海とよきれ見るあふせてふなるあせまれに
露のかりあひみそめたるおとこれとこつらふ
しけり

和泉式部

しら露も夢もこのよもまほろしもたとへていへはひさしかりけり

後拾遺和歌抄巻第十五

雑一

題不知　　善滋為政朝臣

年ふれはあれのみまさる宿のうちに心なかくもすめる月哉

宇治忠信女

月影の入をおしむもくるしきに西には山のなからましかは

藤原為時

我独詠むとおもひし山里に思ふことなき月もすみけり

秋中月といふことをよみ侍ける

源師賢朝臣

みるほかとてもくもらぬ淵海の月の光はたえに住て

池上月とよめる

良暹法師

月影のさしてまかしに池水と見へなかなと思ひけるかな

後冷泉院御時こさはいの家にて月を

よみ侍りける

大弐安房

月影は山の端出るよひよりも更行空そてりまさりける

連夜に月を見るといふ心をよみ侍ける

源頼家朝臣

露おけ枕のちりやはらはん月のさらはいりそ稀まて

月のいとおもしろく侍ける夜こしく

ゆくゑもありかくしてかくれてありふ

年へてかへりより輔親か六条の

家に渡りまゐりけるに人もかはらぬさ

おりふたまへまうりしみあはさ

御前の前さしいてまへなる

に月のうつりて侍けるとなかめ

かん侍けるにたなしんりもなといひ

てよみてつりまゐる

懐円法師

池水はあまの川やかよふらんそらなる月の底にみゆるは

中納言泰憲近江守に侍りけるとき三井寺にて哥合し侍りけるに
月をよみ侍ける

永胤法師

何方へ行とも月のみえぬかなたなひく雲も空になけれは

永承四年内裏哥合に月をよめる

江侍従

いつよりも曇なき秋の月なれはみる人へも今そさやけき

麗景殿女御家哥合に

堀河右大臣

山の端のかゝらましかは池水に入とも月はかくれさらまし

題不知

加賀左衛門

宿ことにかはらぬ物は山の端に月まつ程の心なりけり

依月客来といふ心をよめる

永源法師

我独詠てのみやあかさまし秋の月をおもふ人なくは

賀陽院にはしめてしけるとそ石たて
滝おとしなとして御覧しけるに

ことし九月十三夜になりぬれは

後冷泉院御製

岩間よりなかるゝ水ははやけれとうつれる月のかけそのとけき（とゝまりつゝ）

月の夜中納言定頼かりにつかはしける

弾正尹清仁親王

梅か香にしみ慕てる宵おきゐてこひしくふかゝぬ月をみる哉

そのよかへしもなくて二三日ありて

雨のふりける日見てこのうたを

につかはしける

中納言定頼

雨ふるは園の梅かもさきつらん月は嫌ひしと

人のもとよりこよひの月はいかゝといひ

あまくもりとありつかはしける返事に

藤原範永朝臣

月みるは雅となくそなれともは桂山の葉あるね

おほやけの御つしこゝりみつくゆりを

はらかもれしやし孫りよろく

まかりていのちかけつるに月の影を

しろへまへりけれは

賀茂成助

くもりなく雨やみぬる月をなかめては心も晴てみえけるかな
くもまよりいて待ける人の月みれと
おもしろきれはくもの峯のやまもなく
こそは思ひつゝけゝると覚て

斎院中務

住なれし都の月のさやけさにゆくてくまなき山は忘れさ
るへし

新院中納言

ふるさとに山のはいつる月はみやこにてもさやかなる
月の行て待ける秋小一条のあたりにて
ちこさみむかしをこふる心よりみん待

けるよりよめる

清原元輔

あまの原月はかはらぬ空なから昔みしよやこひしかるらん
月のまへにありしひとのふところて
ろとよみ侍りけり

藤原實綱朝臣

めくりあふ秋の月みるはいつも人のこひしき
前藏人にて待けるとき對月懐舊とい
ふこゝろをよみ侍るに

源師光

常よりもさやけき秋の月をこそ哀ふかしと雲井にも見め

安信民部卿ゝのむすめなりしみまく
まゐりけるかの女房はかりにけま
又法住寺といふ所にこもりゐて
給へるに月を見て

民部卿長家

かくとも小鏡しくも秋もなき宿に月や独すむらん

兼房朝臣の月いくいむかへりしと
あはれにてかくせはやけまは詠給ける

江侍従

月これは山のはたかく出ぬといひし人はみえしや

おりふしありけるころ山寺より月を
見てよみ給へる

源為善朝臣

山のはに入ぬる月の我なれは浮世の中にまたは出めやと

山にこもみまつりひくなりしにはかり
てすみ給けり志ある人も
あはれと見しよりもこそみかはにとは
さるまたれと月のなりしを給ける
となりめてよめる

聖梵法師

昔みし月の影にも似たるかな我とともにや山を出けん

中関白少将よ侍けるに内の御物
忌にこもりとて月のいみしうあかきに
夜いそきいて侍けるをいひつかはすとて女
よかりて侍りける

赤染衛門

いぬとて人のいそきし月影は出ての後そ久しかりける
まいらせすかしはして侍なとさ
らむとおもひしめけるに月のあか
かりけるを詠して

三条院御製

心にもあらて浮世になからへは恋しかるへき夜半の月かな

後朱雀院御時月あかゝりけるよ人
りのかはせあそひていかなるとそ
まうけを物ひきん

陽明門院

今はたゝ雲井の月をなかめつゝめくりあふへき程も遠さ
こむといひつこれをけるへのりとに
月のかくれまはつかりしきを

小弁

等閑の空ながめせし哀にもまたかなしうす出る月影

返し　小式部

ながめしをまちてみるよそに逢誰なるみなありし月

月おなじ待けりよそにしとこに女ともあ

ちて待まうとおもとこまいりんなさひ

いまはまて待たれはよあか

よき人志し次

誰もそら慈き宿とひなる月よりあかの人さ

ことひかりすとなのめなるか女ありたに

月あかゝりけるよめありて待けるを

おかしこめて女おひ待しさかりきれ

もらりてみの日つかりけり

藤原隆方朝臣

よはいかまゝきぬてる夜は更ぬる月みぬ人の名残惜

月のやまのはにいらんとしけるを

見てよみ侍ける

僧正深覚

詠めつゝ月にふさぬ哀れ世の禍をかゝりそ

侍従乃おもまま廣浄ありこりけると雪

て侍らしけるを

藤原範永朝臣

山の端にかくれなはてそ秋の月此世をたにもやみにまとはし

月を見てよみ侍りける

中原長国妻

身のうさもとにおもふ深世にすむ月の影山のくもあはれかな

入道摂政かれかれになりて新まちの
月はいみしうあかゝりとてゆりあへ(へ)こそ
なといひおこせて侍りけれは
そよみ侍りける

大納言道綱母

いかにせん山のはにたにとゝまらて心のそらにいつる月をは

月のおもしろかりけるに入道摂政まうて
こそ物語りし侍るに夜のふけにけるか
きしとなといひ侍けれはよめる

ありし秋の月と我身の末とおもひつゝおもひはいまそまさりけり

村上の御時ゝ人まのかりて侍らさりけるに
へいとゝのこりてはにけるに久しくなりて候
侍けれ

斎院女御

渡ねよおもふかなやめ風ふきねてそては雖雨くなからん

題不知　曾祢好忠

河やおちこの池のみきはのなかれぬとはまやこそ書

六条前斎院に歌合あらんとしけり
またかねてよせあつめさせて小弁かもとにつかはしけり

小式部

引まても根やせまほしきあやめ草けふにせかれてなかれなそかへし

小弁

岩とともにあらはれにけむなかなかにはかなき方もなき歌を見せ

五月五日六条前斎院に物くらへあはせ侍けるに小弁おそくいてきてかたの人々こゝろみてつかうまつりといひて侍けるを宇治前太政大臣の小弁か物かゝりいかんとおもふやうありとてとりのこるまてとゝめて侍りけれはいはかきぬまといふ物かたりをいたすとてよみ侍りける

引つれはいはかきぬまのあやめ草思ひしらすもけふそ刈りつる

そのさきにくらへ侍りけるにそのうしろにかとし侍る後のたれかゝりにつかはし侍りける

馬内侍

ゆくへそ知らすとはかなくてこそあはれなりとかや昔法師にて
まうふ人の道命となむいひけるに
師にて又乃日いくとせふるといひよこせたる
たしかなりけるをりに

よみ人しらす

思ひ出てとふとはなけれと誰かまつこゝに身しぬ命なりせは
わかるゝとも山里に待けるこゝろ人のこと
ひく待けましと又かたりせしそなまなれ

中務典侍

山里をあそてふことゝひはらこゝろをふなりぬなり

馬内侍かりけるはかりけり

新宰女御

茂れしおかぬ誰れゆよの中にいふかひなき者なりせは
武人の心もとなくうらひつきて思さし
うきとし待ちかねけれは

相模

ぬれてみくも摘みにしそ人さまならつき橋と絶て
たとえれりとうらけるいるかりさらい
うふいまいさいつ御しこさと(ぬ)いひてこせく

侍りけるハ
聖あくかれ行けるをいはせん杜の下草盛なれは
ものいひける女に中納言兼輔
のいとかよふときゝておとゝへ給
きり中納言ら侍へ文つかはしくみなり侍
られし女のよめる
よみ人不知
徒に身はなれぬとも侍らぬ人なとし思ひのまゝに
京極右大将道経よりおもちの給ける
ところ侍らきしきる

大江匡衡朝臣
あるよにもあきこゝろかはる夜みさためていつゝもありあさき
定輔朝臣家にてかへしくみなりてかゝるか
とありけれはよしといひくれひとさため
よなしといふ人はなきかなれは
源雅通女
わりなしやよるなる浪に身をなさは時は偽りやすかる
熊野へまいるとて人のもとへつかはしける
道命法師
忘るなよ忘るときかはみくまのゝ浦の浜ゆふ恨かさねん

なをひんと申めありける人のもとをおくね
きしきありけれはよみ侍ける
忘れしといひつるなかは忘れけり忘れんとこそいふへかりけれ
むかしはらからをとつれぬ人のもとに
おほかたの人の心を見るからにやそちまて風をぬかさむ
後冷泉院うせさせ給ひてよのはかなくおほえ
とおりひきこもりてこもりまかりけるに
後三条院位につかせ給ひての七月七日
まいるへきよしを仰せ給ひけれは
周防内侍
天河おなしなかれとききなからわたらんことはなをそかなしき
源雅光朝臣女によをそむきて侍りける
秋のとさあかしにつかはしける
小大君
はちの秋まれねなえはおもひやはいるあきのよのあはれ
大弐国章妻なくなりて秋風の寒む
なりける夜あけくいひをこせて侍
けることにつかはしける
清原元輔
おひきやわかの秋風のさむけさにいそかさき床に独ねんとは

昔ころ為頼長能なとあひともに
哥よみ侍けるに今日のことをは
忘れなといひちきりて後為頼朝臣
侍りてそのとしくれに長能かもとに
つかはしける

中務卿具平親王

いにしへやものおもひともかねとちき昔のたれに
能宣朝臣侍りてのち年九日ころに
かのふりのまへをすきて侍けるに大将道
綱のかりとよりそのよしいひおこせて

侍けるをりにいひつかはしける哥

祭主輔親

墨染よおもはれ多とゝきこそ涙の色もふかくなりけれ
みちのくにゝ侍りけるにしのふの
郡といふ所にまかりて人をたつ
ねけるにその人はなくなりにきりと
きゝて

能因法師

浅茅原あれたる宿は昔みし人をしのふの渡り
そうふをくまゝ侍てそのとしまそれき
かとをわかくつまゝに侍けるに中にかれは

ちりつもりてある琴をとかしのこひて
ひくとはなけれといまはかれてなとすさに
けるはおりくなかしけるをあはれなりけ
る人のおほえみしきたうくかよれ
ふるきけはりのそかしこなといひなを
せく侍けるによめる

大納言道綱母

なき人は音信もせてことのをゝたちし月日そかへりきにける
そこふかくまて侍けるころ先すへき
くりよりよみてひの人て侍てこそりを
ましとおもふまゝにはなをつゝ人を待しさかま
られて

源経隆朝臣

忘るれとひかりきり埋木は色付てそ人をとひぬる
物思ひけるころ忘れいてく嫁り侍けるは
しれにことひのそまはなきゝ人のを
つま侍けるはよめる

小将井尼

人しれてたつの涙の音をせは秘事にかなるよをとしれけん
故中宮うせ給て又のとしの七月
七日に宇治前太政大臣のもとにつかはしける

後朱雀院御製

こその春別し里をまたぬめりなとたくひなき秋月（如ん）
後朱雀院うせ給を恋しくおもほしきよ
のちかなしみの給けるころなれの松を
しろく給はれて

小左近

ちかきにはきへてみましと様むおもひやなんすらん
故皇太后宮うせ給を恋しくおもひて
そのころやみむあ（さきつかた）のなれたりしろく給き
あはれけるにんくいとくちおしくなせ
いひけるとて

弁乳母

歎見てとおもひてもとむかしに風をいとふ哀ならぬ（さ）
世中さかなくて右大臣通房うせ給ぬ
ときて

小弁

数ならぬ身はききさらきの中にあさき雨よりもはかにいて給（ひ）
去年の春もかくてさしはいとく給けるに十
月つかたかくなりて雨より降るとも
思けるをふみてまつりき

新宰女御

枕よけるあさちかうへの露よりもきえあへきなとこそきけ

後朱雀院うせさせ給て上東門院白河
よわたらせ給てあらしのいたくふきけれ
はかの院に侍ける侍従の内侍
のもとにつかはしける

藤原範永朝臣

いにしへをこふるねさめやまさるらんきゝもならはぬ峯のあらしに

後拾遺和歌抄巻第十六

雑哥二

入道摂政よかれ〳〵になり侍けるころ
くまうてなむといひおこせて侍り
けれはつかはしける

大納言道綱母

柏木乃杜乃下草暮ことに猶たのめとやもるをみる〳〵

こむといひつゝこなかりける人のくれは
かならすといひて侍るに

馬内侍

まつ猶の色かはらねハ大井川絶ぬ流をいくとせか見ん
かんなのりとくまゐらすとかきとめひ
けりしるしとによみ給ける

讀人しらす

あさきせとこそ絶し縁よりは朽ぬ葉をあやなく結
中関白うまひとりしめけるころよまし
て給けるつまあてこよひハおしかへして
しそなといひく給けるハよめる

馬内侍

独ぬる人やしらん秋の夜を長しとたれか君に告つる

きみのみかへるとこそのかつらふかくかへ
なくといひ給けるハ

新左衛門

春霧立出んとせしにたかのかしはなき縁なる定家卿に
為家卿にいひけるまゝにし女ようまゐらせてしけり
なりてのち見あまりの日くれまはと
いひしくおもひをこせしく給へれともを
見ぬかなりてよみ給ける

小馬命婦

千色乃草とも見る枯ほどといふにひとつ告ぬへき

たところ来ふけて侍りて来まく給けると
こさに秘くりとこさてまりまれたた
とめてうくあんありしとおもひ
なこせく給けるを返ことに

和泉式部

梅ふくりけるも思ひて簾のをとをハせしよまさり 九
よひのかくて侍りてこそりけるたとこの
ところりけるハ

待つそまつよろそられ枝のをとも思ひぬ人をこそけれ
小式部内侍ありしに二条前太政大臣

あしめて侍りぬとこさてつかりけり

堀河右大臣

人しれて秘こ物をねたに雲の秘よりれ衣くハさ木をせん

返し

和泉式部

ねまこそねと人すハいまも業れねよりの衣くれ糸をとを

平経親菩人のくく給やりにあはひて
人のりとひつよひちらしおりらひけるを
見んおりかしして

周防内侍

秋霧はあちこちせん萩原に鹿ふしまりとけさここそか

實方朝臣のむすめ小ぬしかにかよひし
けるを藏人頼資にあひぬときゝて
この女のつれなくとうらく見ゆる
をしてよみ侍ける

右兵衛督公信

ぬしかくおきつゝこれは白菊の露まてそいとゝ人のひまけれ

大江公資相摸守に侍りけると
ともにくたりて遠江守にて侍ける
ころまかりまうすにかれにしと女を
出てそへろをきゝて侍りける

相摸

相坂の関にはあらねとも東路は家とそ忘れき

右大将朝光かよひ侍ける女なりわさ
なることは人はいへるありといひ侍け
まして女のよめる

よみ人しらす

猶ねかはねはねぬるのおもひ立ゐはわかれわかさみの迷（やまひ）

太政大臣のまかりくたりて四月計に
まゆみれりみちを見てくよみ侍ける

藤原兼平朝臣母

よむ人のまゐりゆく宿は河のほとり草木も物の色に給ふ
女れりしにおくりつさのゝそへて

小一条院

暁の鐘乃声こそきこゆなれ是を入あひとおもはましかは
たところにてうちとけてもまからん
といひちきりていつくおはしまさんひとり
あまたゝひまかりけれはよみしけへくなと
いひて待けるは

和泉式部

いたくふかきてもくまんてそあかつきのかねはかれそあかめ

こむといひてまちふかしけるおとこの
りしにつかはしける
待よひは桂のなそはさためいふにゆかなんおほなん
後三条院坊におはしましける時女房に
わかのまへり柳のえたとさして
待けるとよみ侍ふ柳なりとしあく
みりきつかしらにそのやふれなり
まけきはよくの人れとりあかりとて
こひよりこせらりけきはよめ

藤原頼綱朝臣

青柳のいとふかれそめて立よけつよりこゝへハ我かゝね先
皇后宮女房こゝろやれ女御とやうえ
けつとれさとへまゐりいてゝまもひ
よけまいらせて侍ぬさくふ侍して御
せうそくありけつり

後三条院御製

まださかぬまかきの菊もありといふなる宿にうつろひはえ
わすれしといひ侍ける人のうまくふ
なりて侍しけることとりにかことせよく侍
けるハ

馬内侍

玉くしけ月ハよそくにふかめとともふさり遊とふかとれそ
りの人まう侍とて人のりにいひかさき
侍けつ

和泉式部

帥宮へ参りとまりハ苦てまいらぬに人のこゝみとも
このひとつれとこあめふるかまして
さくらぬまいくらのうりてひをと
せて侍まれたし
かほりにしのつまを人とて侍にふまいてる袖とふ
人のりとへ帰こや侍れとこそうしみや
つまて侍まゐ庭とにかしうひきつけを

侍てよめる

宮に参る人の心よはくなふふみてくさん
れとこれりのいひ侍ける女をいまはさ
らふいうしといひくのちあはれいそう
給りけるよ婉かまそりそさてつかふ
し侍る

三笠山に住ける道ぬといひかとかめてよふとは逸越
としころ見侍ける女をおとこおもひ
まかれてりのくなとそこひ侍り
忘れたる女のよめる

よみ人しらず

歌しる殊よすま道こさ別かハ花ハ春世とと思ふかりそ
兼房朝臣女のもとにまかりてこそ物
いひ侍けるとうくかきさしてうら
てあひいひつゝし侍る夜のふりのこ
しかくなと女のいひをこせたりし
つけ侍てよめる

中納言定頼

古の花なし哀しく侍ふに播越のよ甚ひとかし
大貳資通むつましき侍ふ小式部という

とよみてつかはしける

相模

淡しやおほえぬめのふりぬる天照神のしるしなきよ

元輔かむかしすみける女ともろともに

梅かなしつゝふりよかしきるに元輔

まかりくまゐれはきりとこさて女の

りとにつかはしける

こりぬらんと思ふ人に忘られて我身ひさしくうらむへし

藤原長能

入道前太政大臣遊宴作文して侍りける時

一条左大臣家にはりそめてまかりける

あつとはしらぬもみちやといひはなちせ

そらろそへりとにける

馬内侍

春雨ふりめしくもつかなきや桐木の花を見むとせ

きやうすき侍りける女のもとにまかりて

はしれくとふかくちりきるに祢とこ

ろのみえ侍けるにはあつ

清原元輔

ちのとこよみ出やうけりは唐ひとりしととゆうて

兼澄来つゝしむかしと給けるところにはいに
けり　　左衛門督朝任
稲荷山立白浪のいふなれは名鳥しく見ゆらん
返し　　兼澄衛門
風ふけはおなしこゝろに咲けりと稲荷のやまの浪とならさき
中納言定頼卿とかくされてひとり給
けりこゝろみにきゝとゝろさしていはき
の中にをさせ給けり

相撲

人之道にて侍らんや河内国之守経輔のもとなれは見えに
女のりにまゐりてけるにおほつまとくと
給ひそ給はれい
　　　大江匡衡卿
相撲の使にあるさし使さるゝは東北とも聖上のもとに
十月ついたちにまゐりてさゝりけり人の
三条のしし給けるにいゑにてとみえさきに
　　　馬内侍
かさくりも河内なるものは新なる月宮の実なるや淀に
大納言成親ぐりなとし給けるに
内の佐りのいまにこりもいとそいそぎ

かへりてつとめて鳥のこゑにもよほさ
れてといひおこせて侍けれは夜ふ
かゝりける鳥のこゑは函谷関のことに
やといひつかはしたりけるをこれはあふ
坂の関に侍りとあれはよみ侍ける

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさし

三輪の山しろうまかりに侍ける人へとた
いめる人まかりて

素意法師

盛乃三輪の山辺をたつぬれは杉まの月乃影もみにしみ
ちりうなといふ人のしのひてこむ
といひける夜に

相模

東路乃かたへまかりけるを逢坂まてはこえて京
俊綱朝臣ひとしくふくつかりけれと
なりともせさせきこえとおもふとい
けれはゆくらの花よりさきてちりけり

遊来姫君

ちりはしとふかのよ桜花よそのこととはなへてかさらめ

しのすくもなきおとこにかれにけり
こゝろのほとこれりとりける事をさ
ちぬいまはうちとけ給ひしなといひ
て給へれともよめる

下野

侍てあるに岩まれみかりけ絶とかよはぬるなかりける
能通朝臣女ともりひけて石山にこ
もりてあそんしとといのり給へりなふ
よしれゆめをみんく女のゆめのとおもて
ふかくあむもこうとといひつうし給へれ
そくよみて侍りける

四條宰相

わりまんとは葵て頭てよ梅を着てふかきよ惜れ
資良朝臣新蔵人にて給へるを見國韓
神の祭れ内侍よりよみすとてみそ
こきよれとこのよれうこは志らしなきれ
そそのかしみよいのしんといひて
給ける返ことによめる

少将内侍

逢さたにさのみそれを何それかたみませいかにもえ

家経朝臣の梅の歌よみ侍りけるにおな
しきにあまた人々よみ侍りけるに
侍りし歌

伊賀少将

とふ人もとめて遠きに錦なれはねくらをとはむ宿に
右衛門蔵人よ梅の侍りけるに
うらのみ侍けるはちいさく成りてに
かきて侍りける

少将藤原義孝

かはれともみえぬのこりと名やかく月はとも見え衣
人のむすめにおきさすへく侍けるをなきあひ
てなくちきりけるをとはまほしくおもふ
なるへしかくきてそのまゝかへり入り
扇にかきつけ侍ける

右大将朝光

おひあつき手にとられぬものひとりあへは心にのみもとこそ（？）みえ
秋をあかしとさひけり女につかはしける

源道済

有りとなきもの遠き林風よそになりも萩の花ね
はときのふきかよひけるにこれそる

乃かれしふしとものめ給けるを海ちと
なに給りられて

和泉式部

あきまさるこゝちしきりまさる秋のよみまれ月にうかふそみ
中納言定頼むまふのすてまうしあ
きこえけるふかくとあけかはいひ給
せるふとくいひく何を給しはへけ
まてし又乃日つかはし侍る

相模

ほとゝそふ心ぞ人よまたさらめるやくと鳴く駒のあか
ぬひかへしけりなせすすて
うしろ見けるて

中原長国

あまつそら我にふかきよせり人の心をとらへあそまれ
侍りけりわかれをとうらむとてなと
し侍しはつきられはまうすのかよ
つまれさく人をかしといひなをとせく
侍りきれはよめる

律師朝範

恨むるはかそのよとつまほふ我を嫌き物ふそ有けり

橘則長ちゝのみちのくのかみにて侍り
けるころるまのうちにて侍りしに
と見侍らぬとこいひをこせてさりけ
ましく文の日侍りける

相模

緑児のやまは岩はみちのくにをぞ頼みける
末葉のいろちり侍りける日人のもとに
なくさとらせける

忘れにつきてもなとかとみさらん葦のね宿とわか身をみよ

返し　中納言定頼

八重葎月の障は若のやふをとせぬ風はおもしと
三条太政大臣の家に侍りける女蔵人
よまいりたりて見し人とめぐらさに
おりけすとうらみ侍りけれは

藤原実方朝臣

わりなしや月は九重なからあとは人のうへとむかしやる
高階成棟小一条院御りきしになりにはよ
まいりとていふにこひしくん人をと
いひをこせて侍りけれは

中宮内侍

ありしそこひと出めはの出ねなかつ人のいは今忘れなて
人はうつなれぬめかまことにいふかく
うらみけつ人あり
上総大輔
さもはるはまさりやはの出ねやとこのめぬたん
小一条院へまいりてふなり侍けるはしめつ
土御門御匣殿
わかおもひなくなかおすくるをとおとこふ数へて
ひころうしとかしたひくりとめまつひ
けのかりにねえくふなりふけつ女の

家よりいりて侍けるは女のかりとよ
つまひらせくらしとみてこそはべさ
もりきりとしひをこせく侍るをきす
ふ
祭主輔親
数ならぬ人をのかひねんまんしとも思はるゝ見
人のつらさとこのひてなきけつつり
あらそしいとひく侍されはよき侍るつ
大貳成章
いそなつく人はあまさへにさふかと誰か家そとかりてこそふん
ひはしら枕とせぬ人のやまふ侍り

折てひところみ侍るはゆかせくとていひて給

たれき

和泉式部

とへとおもふ八重の山吹とゆふともいへはおりにふきや

おほかる人のおりしよりこそわきて

れなし花よつきそ侍りけり

おちこちに思ひそやま侍りてゝ桃やかそ山吹のを

もちふといひくえ侍しうなとせぬおそ

これかゝりにおつくと出てつかりけり

少将内侍

祐あるかへのこゝろあき袖の従ましたゆかをとこふして七夕

師賢朝臣梅いひおこせたりけるをそへん

しかとちかひてのちもまうでこし

てこゝろよなりにけれはよめる

けふよさとかへとてきかれしにさ

つきそ侍りけり

式部命婦

引末をかきて伊かよしきん後けれ梅を中門の方

うとくそかいとて入りきたへのもとに

つかりけり

和泉式部

業しとて隠れやはおかえ梅のゆきまそこ隠されとふかさた

うちよりいでゝはかなくすつきんなとちさ
まけける人のかとりせくさとしてよ
けるもとつかしける

菅原道信朝臣

天の原遠き海の月にほも出るは人にしらせそする

題不知　藤原元真

うれしともまし白雲の山のはにみやほきらんかなかん

斎宮女御

かせまよ
風ふきはなひく浅茅はおのかれや人の心の秋をしらする

後拾遺和歌抄巻第十七

雑三

備中守棟利出家し侍りけるを
人のもとよりつけおこせたりける
むつれりしにつかはし侍る

清原元輔

誰か又年へぬる身をふり捨て
よしのゝ山にこえむとすらん

居りて

源重之

春ことに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ

つかさめしにもれて侍けるとしの秋
そのたれこともおほ井にまかりて
ふねに乗侍けるによめる

大江匡衡朝臣

河舟に乗てこゝろのゆく時はしつめる身とも思ほえぬ哉　さらきりイ

大納言公任宰相になり侍しにけ
ころよみてつかはし侍る

大江為基

世中を雲に被のあるてか涙はよその袖にそゝけり

つかさめし侍るに申文にそへて侍る

藤原国行

清よぬ人の文かいひおせてそ書をやる遅
小一条右大臣よなりつきてまうと
てよみてよそへ給ける

源重之

みちのくに是之のまうりやとて東に我身を見せつるか
後朱雀院御時とし比よるはかう
まうりけるに後冷泉院位につかせ給て
肉さよひよまうりてのち上東門院よ
まりける

天台座主明快

雲の上に光かくれし夕よりいくよといふに月をみるらん
蔵人ゆるされふかくまうりけるに日よめる

源経任

限あれはいかまよれ羽衣ぬきかへてうちそとらぬ雲の材
右大弁通俊蔵人のかみなりて侍ける
とよろこひいひつかはすとてよみ
侍ける

周防内侍

梓ふてふかへてにぬれはいまそとしよりける
後冷泉院御時蔵人よて侍けるをそうか
あまりりてみのひかさ三位のつかへまた

よみ侍ける　　　　橘為仲朝臣

蔵人よりかうふり給はりて雲ゐをはなれて
おなし比賀茂社にまうてけるにその中
かへりて前斎院にまかりて賀茂に
賀茂祭の舞人なりける年試楽の
日よめる　　　　橘俊宗

おもひきや衣の色をみとりにてまたふかけとさね
世中とゝしのへてこりてなかれてよみけるは
八重さくをそてよめる　　　　前大納言公任

かくてさく白菊は庭へつみ花の露とそみてにけ
としころさかへける人をとひ侍け
ことさてよみ侍りけるとも　　　　藤原兼綱朝臣

まつとのみやゐのこゑをわひてあるらむを
ちきりしなかのちきりなるらんいまよ
なこせりよりもまさりこしにそつのりけり　　　　藤原元真

君をおもふこゝろに涙川たちもなかれ中にも関せあやと
月のいてしにはりをてなかりしをとひ

なけきこしなましにあたらしくかはらし
きゝふる高砂の松をみて

藤原義定

秋のこと思ひ侍りける高砂の松のへに松と申侍りける
よの中をうらみけるころ恵慶法師か
もとにつかはしける

平兼盛

世中を今はかきりと思ふにはすへ天慈しやかへんとすらん
賀茂社主成助かもとにまかりてさけ
のみ侍りていまてかへりたまはさ

つけことゝなけきさてよみ侍ける

津守国基

紅葉する世中に住吉の松のみひとりみとりなるかな
侍りさめしにのほりてなけきける
ころ女のもとにつかはしける

中納言基長

わた舟の沈みぬる身のうきさへなかれさふよそ侍さそふれ
そしころなり侍けるむまこのうまへあ
るすかりて宇治前太政大臣のひ
侍けるに雪ふりあるあしさ為仲朝臣

ありしにもにつかさりけり

源兼俊母

昔つ雲井のかはれ駒なりそれと知りしめ
小一条院東宮ときこえける時かれかれになりす
よ位おりたまひてのちにきこえけれやまこと
かちさきしくと見えてよみ侍ける

堀河女御

雲井まで立のぼるべき煙かとみえしおもひのほかにもあるかな
わかれし後宮る松の女御によみつかはりたま
ひしくおほえしにかなりなりてのちに松風に
きこく物さ侍りけると
松風は色や緑に吹つらん物思ふ人の身にそしみける
題不知　源道済
世中を思ひ乱て侍るとおもふむ宿に松風を聞く
世乃中に心まかせれつくしうらみん侍けるころ
月をながめてよみ侍る

藤原為経朝臣

くまなき月のかけを思ひてもとらはなそなかめしれる
ことありて播磨へまかりくたりけるみち
よりも五月五日京へつかはし侍る

中納言隆家
世中にあやしきはあやめ草かな袂よりはそらもさく
五月五日服なりける人のもとにつかはし
ける
小弁
今日とてもあやめしらぬ袂にはひきたかへたるねやかくらん
静範法師八幡宮の事によりて伊
のくにゝなかされて又のとし五月に
大弐三位のもとにつかはしける
藤原兼房朝臣
五月やみこたかの杜の何鳥人しれすとそのみ鳴渡るらん
返し
大弐三位
郭公こたかの杜に鳴声はよそ人の袖もぬれけり
あまたとこそこしめして然しく人あへさよ
しなかせられけると空くよとゝ侍ける
素意法師
ほとゝきすをはく人も物もなくさむまて鳴ぬる杜の郭公
丹後国ふくく保昌あそんすりせんといひ
侍りける来しのふくとさしてよめる
和泉式部
理やいそての庵の鳴さらんしと月かりれ命といへは

西宮のおほいまうち君つくしにまかり
てのちすみ侍りける西宮の家を見ありき
てよみ侍りける

恵慶法師

松風も岸うつ波ももろともに昔にあらぬ音のするかな

二条のさきのおほいまうちきみひころ
わつらひてをこたりてのちなとかとは
さりつるそといひ侍りけれはよめる

小式部内侍

しぬはかり歎きにこそは歎きしかいきてとふへき身にしあらねは

恋しらす　　斎宮女御

大空にせまき袖のこほれぬるかなそさとゝひやらまし

返し　　東三条院

とひやは我身にはかゝる物ゆゑに空に雨のそふらん

世中はかなしきころひさしうおとせ
ぬ人のもとにつかはし侍る

伊勢大輔

なきかすに思ひなしてやとはさらんまた有明の月待ものを

世乃中をなけかりけるころ桜むめ
花を見てよみける

小大君

萩とこそ思ひみけの梅花なるやとてものへ人を思はん

京よりくして侍ける女をつくしにま
かりくたりてのちしと女よおりひつき
ておもひつくをなり侍にきり女まよ
つまなくて京まのほるへきすへもなく
侍けれはとりまかるありてし
なんとし侍けるおりおとこのも
とにいひつかはしける

読人しらず

とふなくもおもはし露のをとこそ思ひとこそやはと

或人云この女経衡筑前守にて侍
けるときともにまかりくたりきまへの
めになんありけるとて女なくなりに
けるは経衡のちにこさてつまてんや
かけりのちの心からとてはことを
もとめひのかせしまに侍ふくり

世中つねなく侍けるころよめる

和泉式部

物をのみ思ひし程にはかなくてあさちかすゑによはなりにけり

思ふこと今はなき身を月はみやこに数くとしやなかりけん

おりふるゆけることりみちさてまちく

つまふしてよみ侍ける

いつかれは常色ふく露まて波はあふさとふらひて

世中心かしく侍けるに中ふくれり

中納言定頼かりにつかはしける

堀河右大臣

常よりもいつるきはの言葉はなくなりゆくそ人かなし

中納言定頼

草木にもなをいつりの露の身はいつまて数よいろんとすら

よの中つねなく侍けるころひさしく

おとせぬ人のもとにつかはしける

赤染衛門

ここにさへ此よとかなしの露のみやまなみたの人の世に

世乃中をなにふむさへむといふ梅

とふことにかたさそあまさよみ侍けるに

源順

世中を何にたとへん秋の田をほのかに照す宵の稲妻

中関白の家に法興院ありしころにて

おほつかなくふれるなき侍けるは

圓昭法師

明ぬるかとみれハ河影に千鳥鳴をふとたちかへる詩

文集乃蕭々暗雨打窓聲といふ事を

よめる

大貳高遠

恋しくハ夢にも人をみるへきに窓打雨にめをさましつゝ

王昭君をよめる

赤染衛門

歎こし道の露にもまさりけり馴にし里をこふる涙ハ

備部懐壽

ふるさとや古き都と立かへれとものこゝに人ハなかりけるかな

懐圓法師

見る度に鏡の影のつらきかなかゝらさりせハかゝらましやハ

入道前乃おほいまうちきみ法成寺にて念仏をこなひ侍けるに坂東の時よかへんとてちかひとこ縁に侍けるに鳥乃なき侍けれハむつしをたかひそひよみ侍りける

井平尼

古ハいとしくいとひし鳥のねれ嬉しきさへそ物ハ秋き

後の世にいそく日にみつ右をたる鳩

のちしらにきこえけるを

増基法師

ことしけれはよのゝ山へはおくれぬる心をは任せつゝ
からひゆけゝる人のもとよりよそをむ
きかへとかへりしきいてといひたこ
せて侍りけれは

馬内侍

志すに極楽世界をとふ何かのゝ人なりけり
山のおくにて法師になり侍りける
人につかはしける

藤原長能

行くそれ身のほとはもとより深き山にはすませて
彩家朝臣世をそむきぬときゝてつかは
しける

律師長済

浅しやおもひよりはかりける独りはましとゆかしとふな

中宮内侍尼になりぬと聞きてつかはしける

加賀左衛門

いそくさの袂をたちくらかへてはしたなきん

返し

中宮内侍

うきことをなにかはしにまかりとあそてことさへてやしき

上東門院あまたになりし世のありさまおもひけるに
よみてきこえ給ひける
選子内親王
君まさでこそ織のはた衣ぬかり秋やかさねてやかさねけん
高階成順よをそむき侍りけるにあさの
衣を人のもとよりおこせ侍るとて
読人しらず
今日とても思やるにもあさ衣かさねし露の袂なりとは
返し　伊勢大輔
思ふともいふにも袖のとゞまらじや衣の玉をかけつる日は

後一条院うせ給ひて世中はか
なくおぼえければ法師になりて横
川にこもりゐて侍りけるころ上東門院
よりとはせ給へりければ
前中納言顕基
世をすてゝ宿を出にし身なれども猶恋しきは昔なりけり
御返し　上東門院
時のまも恋しきことのなぐさまば世はふたゝびもそむかれなまし
よをそむかむとおもひたち侍りけるころ
前大納言公任

思ひしる人をもみこそよの中をいとふとならはそむきなん

三条院東宮と申けるとき法師になり
なりてみやのうちにたてまつり侍ける

藤原統理

君に人なれなならひそおく山に入ての後はわひしかりけり

御返し

三條院御製

忘られす思ひ出つゝ山人をしかそ恋しく我もなかむる

法師になりてよかはに侍りけるとき
さくらの花さかりにつかはすと

前中納言義懐

見し人も忘れのみゆく山里に心なかくも来る春哉

世をそむきて長谷に侍りけるころ入
道中納言のもとよりとふらひまてこそみなれ
しなから中になりけれは

大納言公任

谷風にいつとまちてしらん心はなくや絶ぬるのを

良暹法師大原にこもりゐぬと聞て
つかはしける

素意法師

見んさきおもひゝれ清の庵にて心すむ月の影はいかにや

返し

良暹法師

程へてやもり月とうかはん大原やおほろの清水すむ名計そ

良暹法師のもとにつかはしける

藤原国房

おもひやるこゝろさへこそさひしけれ大原山の秋の夕くれ

なとゝせになりけるに法師のやまさとにこもり
て侍りけるをまかりてそなんなりと
くゆしきといひ侍けるをきゝてつかはし
ける

律師朝範

思ひすてゝいとゝみえき捨ちかへりてはまた人のためかは

長楽寺にすみ侍けるころ人のもとに
かいひく侍けれはつかはしける

上東門院中将

おもひやれとふ人もなき山里のかけひの水の
こゝろほそさを

後拾遺和歌抄巻第十八

雑哥四

則光朝臣のともにみちの国にくたり
て武隈の松をよみ侍ける　　橘季通

たけくまの松はふたきを都人いかゝとゝはゝみきとこたへん

みちのくにゝふたゝひくたりてのちのたひ
たけくまの松も侍らさりけれはよみ侍ける

能因法師

たけくまの松はこのたひあともなしちとせをへてや我はきつらん

河原院にてよみ侍ける

大江嘉言

里人のくむたに今はなかりけり岩井の清水みくさゐにけり

松かしところにて松をよめる

江侍従

年經たる松たになくは浅茅原なにか昔のしるしならまし

としころすみ侍ける家をとりのへまかり侍ける
ふすくとて松のこすゑのみえ侍けれは

左衛門督北方

よそにてもみし人もなき故郷にまちかねし松そかはらさりける

六条中務親王の家に子日の松といふ人
て侍りけるとしの九月ばかりてのちに
書とみえくるよし侍りける

源為善朝臣

忘らるゝ松ばかりこそ残りけれいつまでの子日ありきん
ひとりなる子日とは忘すやとてともに
あはれなりける人の松をもむすひて
をこせて侍りけるにあはせ

馬内侍

誰とまたふまつといひしかりしらて中々ねたけなるかな

緑竹不弁秋といふことを

大蔵卿師経

みとりなる色もかはらぬ呉竹はよのまの秋やいかにしるらん

永承四年内裏歌合に松をよめる

前大宰帥資仲

岩代の尾上の風に年ふれと松のみとりはかはらさりけり

ら人の松のことも雲居よりおひさりと
いふことをよませ給ひける

御製

万代の秋をもしらて過きくるは葉かへぬ谷の岩ね松かな

題不知　藤原義孝

深山木をねりそをそ世は猨の杉に杉すまれんとそおもふ

宇治にまかりて侍けるに山家
の猨宿といふところを

民部卿経信

猨ねとふ宿ハ深山にとちられてかさねのひとつふ
関白前おほいまうちきみ宇治にまかりけるにさる
さハ乃池をよみ給ける

藤原範永朝臣

名もしるくいにしへ人のまされ池にハいつもの鶴かな

次の池をよみ給ける

藤原経衡

立のほる藻塩乃煙絶せすハ雲にもたつ猿沢の

鈴門殿にて　中納言定頼

人々をあまたおくりし山の猨の宗ハあれはてにけり
やよひの月鈴門にまゐりてたきもとに
みちとせのうら義忠かりし乃花の約
りをいてさはりといひ給けるによめる

弁乳母

物いはぬ人さへ桃の花いろよりへたてぬ猿沢の池

みまかりのちかく成侍ける時館のまへよ
り石なかれてあせさいまてよみ侍ける

藤原兼房朝臣

せきいれし石のなかれそ流てとゝまりの絶ぬともみつへき哉

大覚寺の滝を見てよみ侍ける

赤染衛門

あせにけるいまたにかゝる滝つせのはやくそ人はみるへかりける

法輪にまいりてよみ侍ける

源道済

年ことにせくとはいへと大井川昔の名にそ猶なかれける

ちくまかは人にはかりてすゑよみくまえ
えんといふひとのちかくなりてかはらにて
月の輪といふところにてかはりあひてら
らくとはしめてこそゆるしよみ侍るに
かくけれとて

祭主輔親

はきなる日にかりの宿をもとめて月の輪よくこそ

修理の大夫惟正あのつくしに侍ける時
ともにまかり侍て清水のまへ山を見侍て

源重之

生の山風くにの白糸は人をたえぬ招ふそなきける

延久五年三月ころすみよしにまいりて歸
給ひけるさによませ給ける

後三条院御製

住吉の神もあはれと思ふらんむなしき舟をさしてきつれは

民部卿経信

おきつ風吹にけらしな住吉の松の下枝をあらふしら浪

花山院の御ともにくま野にまいり
けるみちにすみよしにてよみ侍ける

恵慶法師

住吉の浦風いたく吹ぬらし岸うつ波の声しきる也

右大将済時すみよしにまうでて侍る
ともにてよみ侍ける

藤原為長

松これはあをちかへる枝と住吉の松はいくたひ波のしらけんかき

すみよしにまいりてよみ侍ける

平棟仲

忘草つみて帰らん住吉のきしかたの世は思出もなし

蔵人に侍けるとき祭のつかひにて
すみよしにまいりてよみ侍る

源頼實

なしと神はしるらん住吉の岸に白浪あらむかきりとも

くまのへまうて侍けるにおとみよりよめく
住吉にすとてよみ侍りける

増基法師

時つ風吹の玉は住の江の神さひませる松のこすゑよ

峯岡和家にて歌たりのうたまてにいと
をかしうよみ侍けりときこえよしの
あつまなたてふ人侍なれは見てこのてる
てまつり侍けるにつきまゐらせける

藤原来つ

ねきこそ久しくなりぬ住吉のまつはさひしとはさなみをあん

上東門院住よしにまうてさせ給ふわさ
のついてより冬まありてかへらせ給ける
によみ侍りける

上東門院彰寧相

都出て難波よりみてに舟まつは久しき旅の心ちこそすれ

天王寺にまうりてかめ井にてよみ
侍ける

弁乳母

万代をもちかめ井の水やさはとこの川のなかれなかれん

長柄の橋にてよみ侍ける

前大納言公任

橋柱なからましかは流れての名をこそきかめ跡をみましや

天王寺にまいるとてなからの橋を見て
よみ侍ける　　赤染衛門

わたりけるなからの橋は橋柱あるにかひなきふるくさ

上東門院をみよしにまいりし頃
人々よみ侍けるに

伊勢大輔

古にふりゆく身こそ哀なれ昔なからの橋をみるにも
ましきのうしろいふところにて

道命法師

花山院の御ともにてこれはかのあまはしくに経
過聖にまいりてあすいそなんとし侍
けるよ人々志もしはふるひなんや神をも
ゆふしてかけひなとひ侍かれに
なとなし川のほとりにうらの白
こそしすれ侍けるは

増基法師

山鳥のしらをもいぬにかゝりわたの入江河やこれん
とみよしにまいりてかへりきるに證経卿

なにはといふ所に侍しころてゆかりとを
て日本あそひしまゐりのあそひけつ
よみ侍こひしきといひをこせて侍
それもみちよりつかはしける
藤原孝善
別路はいつもなけきそすれとこの度は行方にいつぬけ
かとにまかりける男のもとへあかねのなを
とれおちぬかりかへろひく侍けるを見
てまうきかりきつゝ女のいひつかはしける
よみ人しらす

たちかへりおちぬかりに振袖の袂よりゆきとつむなみたかな
返し
中ふ面ゆれ袂よりまさるかなしとふかく
祭のへさしに思ひ侍まゝしるかく
うれそすうとしろり
安法法師
とのもかをれ袂の中ふ面ゆれゆかそみそれり
実方朝臣女のもとにまかりてこそく
しとおかし侍けるに女のこゝろしかね
人してつかはしけるとよせて侍けれ

しひさ給ふなりつとめて世のはかなき

よみ人しらず

明ぬ夜の心ちならしにやほとゝぎすとはさてもとぞ思ふ声そかや

返し　藤原実方朝臣

独のこゝちまことのふみあれまぜは宿よりはまでや

なつをふまへりけりとこそ見ものとふみよ

やとりんとし給ひけるをみるもとほりてかね

いひけるいふ人をとてよめる

赤染衛門

為家せし人道のむすめのは木丸とのをいでてみさき

貫之か集をかりて返すとてよみ侍ける　恵慶法師

一まきにちゞのこがねをこめたれば人こそなけれ声はのこれり

返し　紀時文

いにしへのちゞのこがねは限あるをあふばかりなき君が玉章

紀時文がもとにつかはしける　清原元輔

かへしけん昔の人の玉章を聞てぞそゝく老の涙も

家集乃かへしめふかさつかは　祭主輔親

萩の上に紅葉のちりかかりつめてこれをちりにしやちらんとすらん

伊勢大輔か集を人のもとにこひにつかはす
とてせく侍りけるに侍りけれはとて

康資王母

鳥のあとかはさやはしくやかうしき昔なかきみえさつかりて

後三条院の御時に月のあかかりける
夜殿上人あまためして御遊ありける
に人々おほく御前に侍りてよろこひにあ
とおほせことありけれはよめる

後三條院越前

いにしへの藤風こそ嬉しかりけれちりくとおもへく

七月ついたちころ女房の月見によみ侍り
あそひけるに殿上人云後朝の納言か
はまゐりたりとていひおこせはへりける
つかひ侍けるを九月晦日ころかへさ
こしめしておほんうらみありき
給をはなをたまひける

後三条院御製

秋風にふくとのやなをはきえんとぞ秋の月のほのかにてなからは

義忠朝臣のいひける女のいかなる女に

又よみたりけると云てつたへ侍る

前深来つ

識よやをは捨山の月とみつゝふけしよを思ひやると
かくつけむといひし道命法師のもとに
まかりてさふらふ人のよみ侍ける

よみ人しらず

絶やせん命をとゞめぬみな世川流てもしみよるさと
をさ所よ侍けるにをとし侍る侍まゝ
たれは村上乃女三宮にやとり侍りひ
つてまうりやまれこころふりなとい
ひさこせありけるをへりけるに

祐子内親王

いかなまでと侍りし祖よりあのさよやみとし山ざとにも
良暹法師搦いひこせる人よあひくさ
さきしとなけきされてり侍けるに
かんよの人よかひありといひよせこせ
て侍られたてまつりける

藤原孝善

嵯さを父ふ侍ふ侍むの待そかさと花袂を
そうしひあるかとこれ女のりとにつかはさん

よく斎にこひ給けるをわすれけりふす
ときゝよみ給ける

和泉式部

くすへは魁ととま根とこゝやたえなんこひのまされは
五節命婦のもとにあつかはしけるこゑのひて
うちふところにさしてそまゐしともしらそれ
命婦のもとにさしをかせ給ける

六条斎院宣旨

思ひねとゆへそ涯も時ゐるよふ垣ねのくれなけれは
そらことなけきこ給けるこころかさらふ人
のゐえてなとし給ひぬよつかりける

馬内侍

うちきこえのふゐ御みあき見しまさるゝきたつはさゝきや
御あかりのなへとりちて給けるを大盤
所より人のこひ給けるはかりなすと
てゐへりかさつきを給ける

藤原顕綱朝臣

おもつふ涙しましけ衣のゐぬめかしいてつかなの
みすいうへき

後拾遺和歌抄第十九

雑五

後冷泉院の御子におはしましけるとき
二条院をしめてまいり給ひけるところ
てさつることやおほえんよみ侍ける

出羽弁

春の日のひかりおかしくもまとゐにこ葉の松はみおりき

二條院東宮にまいり給て藤壺に
わたりしゆけるに前中宮のふちに
かくおほせしことなといひける人の
侍けれは　大貳三位

思ひねの涙なかけそかくはかりせはしとしに藤のゆかりを

返し　出羽弁

春乃日にかへらさりせはいにしへの袂ならしや猶そて重

後冷泉院御子におはしけるとき
乃花のこととも一品宮に女房とりつゝ
小採花をとりてあそひけるに旅中家乃
出羽も侍とさそて侍りける
源為善朝臣

花盛春の深山にゆかりのよそひとなる秋乃ゆふ道

三條院春宮と申ける時式部卿敦儀親王
むまれて侍りけるに御はかせたてまつる
とてむすひつけ侍りける

入道前太政大臣

万代を君かまもりといのりつゝたちつくりえのしるしとそみよ

御返し　三條院御製

いにしへのをきまもりけるとこそきけ君か世まてのしるしなりけり

式部卿の母は故大納言濟時卿の女
のおほちにて侍れはそのよしを
大将やとりもちあつかひまうしけるを思ひて
いそくよまちせさせつるなり

一条摂政うせ侍りてのち少将義孝子む
まれて侍りける七夜よむといひいそく
よみ侍りける

法住寺太政大臣

ちくまつを思ひそ出る昔をはのこしける君をこそ見れ

六条大納言みまかりてのち橘しゆきに
くらり侍りける人の月ころのこれるにそてこそは
なかさこれかんいふと物ふ人のひきれて
かくとおもひつゝとやありきんよみ侍りける

源相方朝臣

ふるきたくひもいそ昔も有のへはしへまてそ忘れさ
後一条院のおさなくおはしましけるにされ
まつり御覧しけるにみさしきのまへとをり侍り
けるおりに入道太政大臣いたきたてまつりてま
つりて侍けるを見てそてまつりてのちに
太政大臣のもとにつかはしける

選子内親王

光出るあふひのかけをみてしかは年へにけるもうれしかりけり

返し　入道前太政大臣

もろかつら二葉なからも君にかくあふひや神のしるしなるらん

後一條院御時賀茂祭侍けるに上
東門院御輿にのらせ給てむかはせ給ひ雅よ
てらへてせ給ひよろりみのかはさきさん
させ給ける

選子内親王

御禊をりの河瀬にさしれ立やよろとそ侍けつ
後冷泉院御時上東門院によみゆきさせ給
らんとしけるをとゝめりてのちうちより
もてつきれそのふるに桜の枝をつけて
あてさしてせ給けり御返りのに御は
せしとよみ侍ける

上東門院中将

みゆきとかよふにほしせし今はたゞ梢の桜ちらずもあらなむ

小弁新院にまいり侍りけるのちふるさと
てまかりいでゝしのびにとはせ侍りける
返事に　　六条斎院宣旨

ゆふされやなげきこしまゝとかる月のおもかげをみてみしぞこひしき

宇治前太政大臣かねて侍りける時白河
のつりどのにていくたびもあまた侍りて水の上に花ちりけるを
けふに大納言公任がもとにつかはしける
　　入道前太政大臣

ちらつもるみづの上にはたまうつるひとへなるさくらぞなかりける

返し　　前大納言公任

見し人もかはるみぎはのさくらをもまだみるべくぞちりさかひける

二条前太政大臣かねて侍りける時白河
のつりどのにて水の上の花をよみ侍りけるに
ちかけもしは入道前太政大臣ありしにつ
かはしける　　前大納言公任

みやま白河の家のあたりにはなのちりけるをみてま
上東門院長家民部卿の三条の家に
まうらせ給ひけるにみかはれにゆきさかり

てちかく人の家の侍りけれは梅の花さ
とくさかりなりしその花を待侍りその
ころほひにさとよりまいりてせよとれ
けれは雪ふりける日よみてさしいて侍
ける　　　　伊勢大輔

年積るかしらの雪は大空の光にあたるけふそ嬉しき

返しとへしにとおほせしまち
ゆつりまうによ侍り

冷泉院東宮と申ける時女のいてぬる
みやとてことかくしまさるころをよめと
譲られけれは　　源重之

年をへてすめる泉に影みれはみつはくむまて老そしにける

妻うしらさき人へかへるところを思
まうけるを見んとて
　　　　花山院御製

春くれと消せぬ雪なるかしらをそへつらに積る雪そ絶ぬる

三条院御時大嘗会の御禊なとすきて
のころ雪ふり侍けるに大原にすみ侍
ける小将井の尼のもとにつかはしける
　　　　伊勢大輔

まふともふもとみえみそれとよほにて小塩の山のみゆきやう

返し　　少将井尼

小塩山梢もみえす降積しそやすへらきのみゆき成らん

一條院うせ給をあまりひて上東門院に

いくほとを経まけりし文のとしの五節のころ

むかしをおもひいてゝ人のもとのことも聞えさせ

てまつり給けるに中宮にかはりてよみて侍る

伊勢大輔

見渡し山藍の衣のからにもあらてけさ涙にかけて給らん

中納言実成宰相にて五節してまつり

けるにいりしよの弘徽殿の女御なりしに

侍る人へしつきさにいてありけると中宮の

御方の人々そのたいにてみんなりし

きんりしきとかしつきさにくみちらん

われともおもはれよとそうんとおもひてもとめ

ふさらり絵の扇に蓬莱の山作り

かくして作りてはひけのかとをむ

もとひつきてあれりのをたちふかに

めてみの女御の御方に給りける人のりと

よりおもしろくたく宮のさまれりとに

といふをききてそのひとかへしよませける

よみ人しらす

おほいまうちきみの家人々しかてまうて日けしきをかしきを
くて勝時乃祭よなりて二条前太政大
臣中納言て祭使し侍けるにおくりし
ものにはきに沈のくし銀のかうらいの
のはこにかみおくしいれてつかひて
中宮乃いつしかおれいやひけせれ
かしてうしんのこよおしてかくへき
て侍ける　藤原為能

日影草やなかきやまひかに手すれ鏡くりぬ
おかし人の五節よわたるのさみかつ
きれうさねよおとそりいて侍るひを
なとつきありける人々見ん侍るふおと
さうのきしふうきてむすひつきさせ侍
ける

選子内親王

神代よりきかる衣とのひかし文室てしめたとさか
一條院御時皇后宮五節出てまつり
侍ける人のつきそ侍るおとうとをもけ
ていうふせんといひけるをきゝてむすひた

くとてよみ給けり

藤原実方朝臣

是門の山ねかくれにまうでたりといかなるひとのともなひて
物いひ侍りける女の五節に出しと人に
とききて給けるにつかはしける

源頼家朝臣

数ならて逢なきこころもとよみかなくれなきよ
人の子をつまんとしきりて侍けるとこ
ろをたをとこきてしと入りつまをとり
にたれしによみ侍

法眼源賢

とひきや我こそめのわらは椿子と人の雛花とこそ
ちしれこそのなる女とよみ給けりとに
つかはしける

平正家

伝流なるそての末にこそはなれ我ぞとてぞと今の
一条院御時大弐佐理くしに侍ける
まゐりかへかはさにつかはしあるなれはふ
みききてそまつらんとてかれつつき
うたとくよませ給けるによめる

源重之

おいとこれは松の木のさかり君か千とせにかはらんとすらん
ちとせはりとしにおきなりて筑前守になりて侍
よしかくのちに肥後のかみになりて侍
けれはいひやりてよめる

中将尼

そのかみの人はおなし筑後の松のうへこそ我をしたふらめ
阿波守になりて又いかなる國になりかへ
つきてくたりけるにあかしの浦といふと
ころになかれのすむとそてよみ侍ける

藤原基房朝臣

あかしの浦よりのほりて波をおもふしふねよりのかへ
頼國紀伊守にてくたり侍りける時に人
にさしかはりて國へまかりけるとてよみ
物もいはさりけれはよみ侍ける

連敏法師

老の波よせしかと人はいふともしらんなみのそれははるかに
肥後守義清くたり侍りけるにそのとしのあきさ
みのこるかはきさやしといひわたりてせうとへ
けるへりことにつかはしける

源兼長

うら道弱をとせぬ秋の野は草枯かたと見ゆる垣
あつまに侍けるはらからのもとに便り
につけて遣しける

源兼俊母

白ひさや萩のさかハ東路よこえぬる人の風よつましハ
久し

康資王母

吹く風こゝちぬる人ハ月は道え萩の花ちるへしと思ふよ
清くしよりのあはれそきこしに徒り
きゝにあちれさくのたりしろく侍りを
他と見ん

大弐高遠

とりまとく秋萩に露や玉みたれむらむきえたまゆらそふ
みちのくに待けるに中将宣方朝臣の
もとにつかはしける

藤原実方朝臣

やすらひて思ひ立ちにし東路にありけるものを憚りの関
くゝしひけるひとのりそみちのくにより
みとつかすとてよみ侍ける

大江匡衡朝臣

見ちのくのあたちのまゆみ君にこそ思ひためたることも語らめ
実方朝臣陸奥に侍ける時いひつかはし
ける

数ならぬ雅なる君は思ひ出る部の人はさらにとふめり
起し　藤原実方朝臣
忘れなん人の中には忘れなと待らん人の中はまたやは
摂津国よりよふ人のいまなんくるとい
てのちふともまた京なりありけるを
さきて人まかりくにあつ
藤原兼房
ありてやはそせ行きさ所の里ぞ今ぞ生田の杜といふ
六波羅といふ寺の講にまいりて待ければ
さのふまかりれなさしに見えけるなる海のうき

いふにあらで待けるはいひつかはしける
相模
ゆく道神にやとけしくとまふう清水にまかひ給ける
石山よ帰りけるに石よ山階といふ
ところにてやまとみ待きるに急あつし
乃あし給ける時また見え待るれはたま
へふさにもみていひ給けるとよふさる
しもなといひやりけるは
和泉式部
ゆきさき待らんみよかくなくしもたゝそは山科の里

山階寺供養の後宇治前太政大臣の
もとにつかはしける
堀河右大臣
深き海のちかひは志らず三笠山心たかくもみえし君かな
山庄にはべりて人々みちに家経か為八
条の家ちかしこゝにてくるまとゞめて
いまつくりたんありきけるふなかふにいとくり
のこちせしくいとたかう侍け
またしすつまたそのうへにかさつきて
つりける
伊勢大輔
こと枕かりの旅ねはよかさや入日のあかれひをよゝをと
山庄にはべりて日くれにけれは
源頼實
日も暮ぬ人もかへりぬ山里は峯の嵐の音はかりして
伏見といふところに四条宮女房あまた
あそひて日くれぬ行きかへらんとし
けれは
橘俊綱朝臣
都人暮れはいそく（かへる）今よりは伏見の里の名をも頼まし
くらふ人のもとにいひしころありて侍り
つまありけるにおはぬく行きしやかつま

きてよみ侍りける

よみ人しらず

とはれもすき宿も昔の宿ならはかはらぬ人の心ならまし

比叡の山に二月の五番にをこなひ
し侍りきりその花つみてせんとて山よ
よひのかをしく侍けれはむかしこの山に
て物なとまなひしことをおもひ出て

蓮仲法師

おもひきやなれし人よりさきたてて花のあたりに出ゆくへしとは

おなしところにて庚申し侍りけるに洞蘆

のちの琴のねなんとよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

絶えけるかみつねをくりもみれはそそきあなれ

入道一品宮よ人々まゐりてあそひ侍るに
式部卿敦貞の君ふえなとふきけれは
梅さき侍けれはいつのみこれなりに侍ける人
のもとによ人の君えんの花をしかはしよ
しなひよつかりまゐりきこゆとみえてはへ
きこえてあふとのかふや人しもこそ
おもしろきてとりめけるとおもひて侍ける也

しに

相模

よろこちくなりしをさき鶯はなへつり宿よその笛竹
人のおふさにやまさるの人をもすまぬまき
つまれしうちと見えくるあら

大中臣能宣朝臣

なかしのはなさきにけるを葛のはいうさひにまかりて山さと
法師のもとにおとつれけるをよみ侍ける

源重之

たかきぬ山の桜みにまかりて池のほとりにすすむといふところにて
人のみなあさけいてて帰りけるにとまりて

ちるをみてよみ侍けるに

藤原為頼朝臣

をくらの家にすみ侍りける比雨のふりける日
なとしてよみ侍けるにあめふり
まかりける日みの人のかりけれは山ふきを
えたをおりてとらせて侍りけり心もえ
てまかりすきて又の日山吹の心えさりし
よしいひおこせて侍けるかへりにいひつ
かはしける

中務卿兼明親王

なゝへ八重花はさけとも山吹のみのひとつたになきそあや
しき

みちのくにゝて則光藏人にて侍ける時い
りせなといひつきてこもりゐ侍けるさ
とへいひておほかたに人〻のもとへつかはしよか
つらふつけそらいひくさしはまりいて
侍けるを人〻しれせめてせうとなれは宰相中
とあるいつくもへさといひなとこせよく侍る
中しにめと給ひてつゝしみありきれは
則光もとえていふに世なとかくそと申
さりくいひ侍けれはよめる

清少納言

かつきするあまのすみかをそことたにゆめいふなとやめをくはせけん

駿河守國房に車にのりてとりのよ侍る
つけるをまちて定季かかさなりなとて
あなたに車よりおり侍けれはよめる

源俊頼

あるしなしはいさかへしてそやましはのことよりていなんうき
山よとみうまてこゝれゝふく〻ゆかり

くるまかりけるに思ひかけぬ良暹法師
なとあひくむかしれともいひそいひ侍
けれはよめる

慶祐法師

之たいふに数は近たまれハ志らぬ行ひよ由とゝ数ん
行しょりのかりて道雅三位のわ
すゆく松君といはれ給けるをひさしを
つくるにけしうみさりつるなくいひくよ
みたまへりきゝ給

帥前内大臣

浅茅生におもまよひたれたる宿の松はいくらく数にかけける
前伊勢守義孝宇治前太政大臣の
むまやにくたりありところにて清すなハ
しける

天台座主教円

いまへのまゆさしめにも行ねとも君ハ
みまくさとりてふる

後拾遺和歌抄巻第二十

雑哥六 神祇

長元四年六月十七日に伊勢のいつき
の内宮にまいりて侍けるに俄に雨
ふり風ふきていつきみつから託宣し
て祭主輔親をめしておほやけの御事
なと仰られけるついてにたひ〳〵
みきめしてかはらけたまはすとて
よませ給ひける

盃にさやけき影のみえぬれはちりのおそりはあらしとをしれ

御返してまつりける

祭主輔親

おほちゝむまこ輔親三代まてにいたゝきまつるすへらおほむ神

をとこにわすられて侍けるころきふねに
まいりてみたらし川にほたるのとひ侍けるを
みてよめる

和泉式部

物思へは沢の螢も我身よりあくかれいつる玉かとそみる

御返し

奥山にたきりておつる瀧つせの玉ちるはかり物な思ひそ

此哥者布祢の明神乃かへしなり
おとこに忘られて和泉式部かきふねに
こもりえけるとなんいひつたへたる
世中ハかハらしく侍けると紀さかのとね
道有りてまつりけるハしまつるへこそとうき
かみもあんいゝへさとしひ侍けるハよみ
侍ける　　藤原長能
白妙紙によみてとりおきて祝そむる紫の野に
今よりハ何つゝみまゆふ花乃都ま祐さてあ
此哥或人云世中ハかハらし侍也

またハ船岡のこさしに今宮といふ神
といはひておおやけも神まつりそ
まつりたまふとなんいひ侍へる
なる
いかなりふしよみそそきけり侍る
恵慶法師
稲荷山こゝの神垣うちとさきわかねさしても神をこそな
住吉の宮にまうてける日か紀つけ侍ける
山口重如
住吉乃松はへてかねふりしハ何かむかしのわすれなまほ

一條院御時はしめて松尾の行幸侍りける
にうたふへきうたつかうまつりけるに

源兼澄

ちはやふる松の尾山のかけみれはけふそ千年のはしめなりける

後三条院御時はしめて日吉社行幸侍
けるにあつまあそひにうたふへき哥
おほせことにてよみ侍ける

大貳實政

あきらけき日吉のみ神きみかため山のかひある万代やへん

同御時祇園に行幸侍けるにあつまあそ
ひにうたふへきうためし侍けれはよめる

藤原經衡

ちはやふる神のそのなる姫小松万代ふへきはしめなりけり

大嘗祭のうしにまつりて侍ける
小忌にとりくしてさうえきるとてよめる

治部卿伊房

榊葉にふる白雪は消ぬめり神の心もいまやとくらん

式部大輔資業伊与守にて侍けるとき
彼國の三嶋の明神にあつまあそひして
たてまつりけるとてよめる

能因法師

うと濱にあまのは衣昔きてふりけん神（袖）やけふのはふりこ

大貳成章肥後守にて侍ける時阿蘇社
に御装束してまつり侍けるにかのく
にの女によみ侍ける

読人不知

あめの下はくゝむ神のみそなれはゆたかにそたつみつの[illegible]

八幡に詣してよみ侍ける

増基法師

宮こにもこはらく出まし石清水の神の心をくみてしらなむ

住吉にまゐりてよみ侍ける

蓮仲法師

住吉の松のしつえに神さひてみとりにみゆるあけの玉垣

石清水にまゐりて侍ける女のすさのも
とにとみよしれ風しろといひて侍りき
もたしやし濱の柱にかきつけ侍ける

よみ人しらす

ほとこそは宿はかはらめ住吉の松は人まつによりにけるかな

貴布祢にまかりていかきにかき付ける

藤原時房

思ふと何かたに祈らくこそ子は人を御覧むかり

後冷泉院御時后宮歌合に春日祭
をよみ侍りける

藤原範永朝臣

けふまつるみかさの山の神ませはあめの
したには君そさかえん

釈教

山階寺の涅槃会に詣てゝよみ侍ける

光源法師

いにしへの別の庭にあへりとも今日の涙そ泪ならまし

前律師慶暹

常よりもけふの霞そ哀なる薪つきにし煙と思へ

二月十五日夜半はかりに伊勢大輔か
もとにつかはしける

堯範法師

いつはりといしと秋の月は夜よなかに照しも果てゝ入なん

返し　伊勢大輔

よを照す月かくれにしさよ中ハあはれやみにやみなまとひけん

二月十五日の夜月のあかく侍けり
大江佐国かもとにつかはしける

よみ人しらす

出瑞よ院よみの月望とはまさにさやけかり
皇太后宮東三条にはしりたまひ
ありけるころその院雲小宇治前太政
大臣のおこされ侍きりにさしおきける

伊勢大輔

つかふらん蓑をもいつてそちる道清ふあらされ風のふき（あつりせハ さす）
職清をとこなひ侍りけるに備ふあそさえん
とゝく周防内侍のもとにさしおき侍る
よをまかせて侍けるそ人ことに

弁乳母

八重菊に蓮乃露を置そへてこゝのしなまてうつろはすかな

皇太后宮五部大乗経供養せられを
給ひけるに清範経よみ侍りける日よみ
侍ける　康資王母

咲そめしけふの花よりおく露や唐ころもの玉となるらん

故中御門右大臣家の女房車にいり
あひのりて菩提講にまいりて侍けるに
に雨のふりけれは梅つほの女御の
入侍よせりていまひとつの車にのり
なから人のもとにつかはしける

読人しらす

もろともにみつの車にのりしを我は一味の雨にぬれまき

月輪観をよめる

僧都覚超

月のわに心をかけしゆふへよりよろつのことを夢とみるらん

維摩経十喩の中に此身芭蕉のことしといふこゝろを

前大納言公任

風吹はまつやふれぬる草の葉によそふるからに袖そ露けき

おなし喩の中に此身水の月のことしといふ心をよめる

小弁

常ならぬ我身は水なる月なれはよにすみとけむことも思はす

三界唯一心

伊勢中将

おもひとも行ましは海山の中に心の内のはなやさく

化城喩品　赤染衛門

こしらへてかりのやとりにやすめすハ誠のたとへといかて志らまし

康資王母

たきゝつきてやみしほとへいかりの宿そ嬉しさ

五百弟子品　赤染衛門

衣なる玉ともかけて志らさりき酔ひさめてこそ嬉しかりけれ

寿量品　康資王母

鷲の山へたつる雲や深からん常にすむなる月をみぬかな

普門品　前大納言公任

よをすくふうちにハ誰か入らさらんあまねき門ハ人しさゝねハ

書写乃聖結縁経供養し侍りけるに人ゝあまたくふせをくりける中におもふ心やありけん志はしとらさりけれは

遊女宮木

津の国乃難波乃ことかのりならぬあそひたはふれまてとこそきけ

誹諧哥

題しらす　　　読人しらす

笹の葉におりしく霜ゆへはむちりありとふけ侍り

橘季通みちのくにくたりてたけくまの松をよみけるにふたきの松を人とはゝみきとこたへんとよみ侍るとつたへきゝてよみ侍ける

僧正深覚

たけくまの松はふた木をみきといふはよくよめるにはあらぬなるへし

題しらす　　　源道済

ゆくさきは桜と人のおもほゆや桜のゆきはゆくらぬなり

藤原実方朝臣

まだ咲ぬむもゝやあらんと思ふらん何ゆゑまほし風まちにまち

となりより三月三日に人の桃の花をこひにおこせたり

大江嘉言

桃の花宿にまれはおほちはくもとや人のみるらん

三条太政大臣のもとに侍ける人をむすめと思ひてかしつき侍りける女のおやくらゐおちてむすめをいとおしみ侍らん

つゝきなといひ侍けるに三月三日来
のこされたるのみえけるのよりもちかく
とくいそして侍けり

藤原実方朝臣

みなのよれもちぬるにはうしろ雲かくれのふるさとにつき
見んに月をまつ人へとよみ侍ける

和泉式部

思ふことみなつきねとてあさのはをきりにきりてもはらへつるかな
むつましかりける人のいまはかひもなくなりにけるあらん
とおもひて人のもとにまうてありける

よなかりける侍けるにや七月七日作る
をしき

皇太后宮陸奥

天のかはとまれる夜をとちかひしもやまつるしるしとて
小一条院入道太政大臣のかくれなりてと
ころふくらしよませ給けり
りみちとよみ侍ける

堀河右大臣

紅葉は錦ふきしくともそめやらにそ今日あめ
りちれちりそてなりかせにて
ぬき侍けるはかあり

増基法師

おち積る庭をだにとて見るものを　うたて嵐のはきにはらふか

人のもとにまかりてはべりけるに扇をおとして
つかはしける　よみ人しらず

ひえ山のふもとなるおひをそへてつかはしけるに

題しらず　天台座主源心

雲ゐまでいひて扇とおもひしを　うらやましくも成にけるかな

法師の扇をとりにつかはしてはべりけるを
とらすとて　和泉式部

あふことも忘れける扇にもおもひあまりて人をこそ見れ

題しらず

ほかにても同じおなじと思ひしを　よそにのみこそ絶えず成にけり

七月ばかり月のあかゝりける夜女のもとにつかはしける

少将藤原義孝

見てもまたまたも見まくのほしかりし　三条院御時月あかゝりける夜

三条院御時うへの御ためにとて人にかはりてよみはべりける

けふ見つる月かとゆかしけるかなしき

まきれいつさつけし殿上まゐりけり

まゐり　小大君

右近やたとられ神よおもひ出てよまつこそ草枕
人のくにゝおはせしけるにかはらにて人
くさなくとおほせきつゝふかくかんくさら
ちりけるにはよめる

よみ人しらす

まきのこの神にたのみし草木をみせてか
入道摂政まかりて後かまくかすくにうまひ
給けるに様のもしらふこゆきのやさと
むすひつきたりけるとかへりことに
なとせく給へれはいつかをすとてよめる

大納言道綱母

思ひつゝともにはしとみえつまにやとのふみそおとされ
人のなるとへりまちんくさるといひされ
たしよめる

道因法師

白波のあちちかくさになるとよの墨のとよ塩
めのとせんとて使してさるりけるか女の
ちれおそくまへりけるにはよみ侍ける

大江匡衡朝臣

すみちさもとひけるかちをなしてそうせの家あめの紙とりそへ
返し

赤染衛門

はるかにはおもひやるかなしかしこゝはおもちに
つきておもすゝむそ

本曰
部合和哥千二百十八首 云右六十首 左方五十首
以孔部納言家本書写之件本先
朱雀院御房卿自筆也 餘雖書
入自哥二首通俊挑撥之時令懸
鈞筆之了範前守忠仲傳持之今
大是也 披閲之處与目録符合是
為證本乎孔於勘物者清輔朝臣不
注付也

次曰

建長二年仲冬三日叩凍和墨草

蓋依高命之貴忘下愚之恥

者也

時也此戸默風宣掩青竹之窓南

簷納日鋳深眷本之義耳

桑門在圓

みくされ紹なるあかしとならはあるうあしてとく

人はとひあさまん

以下
3丁
白紙